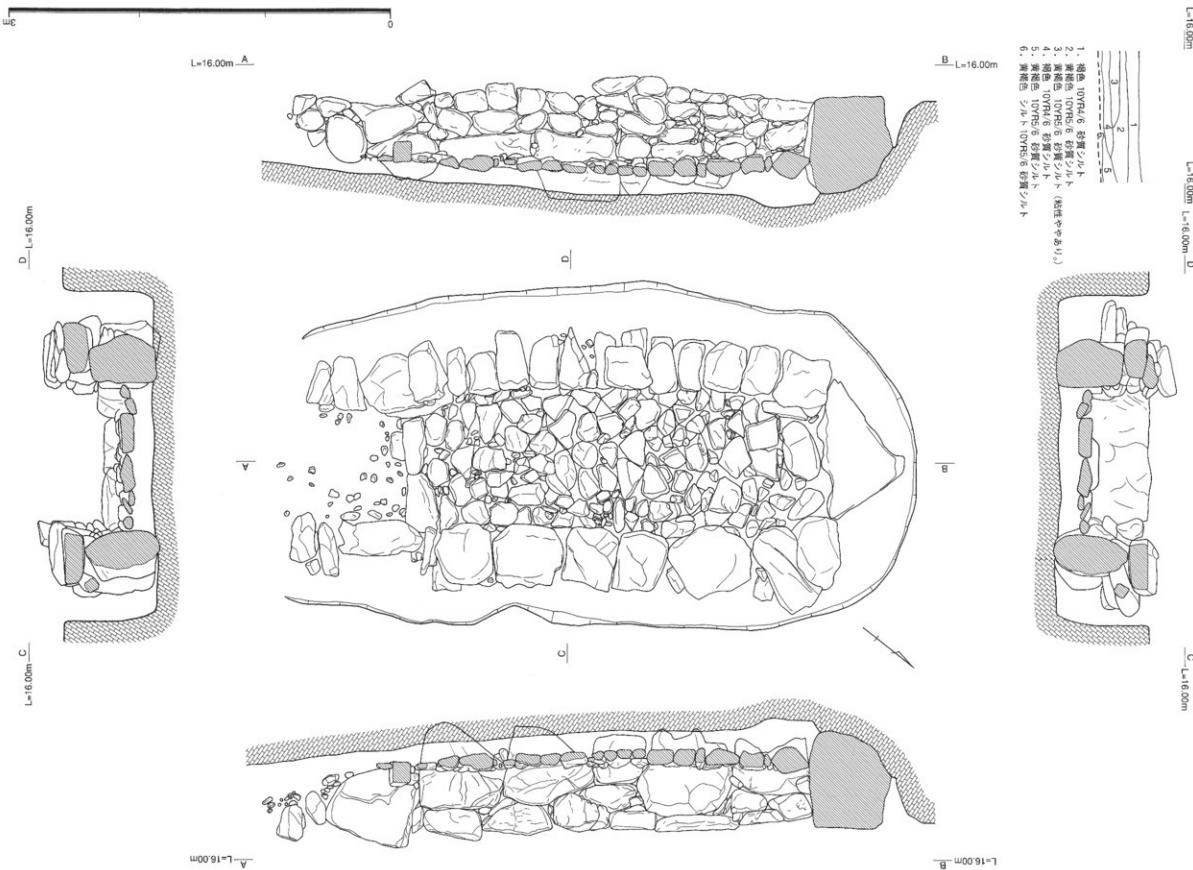
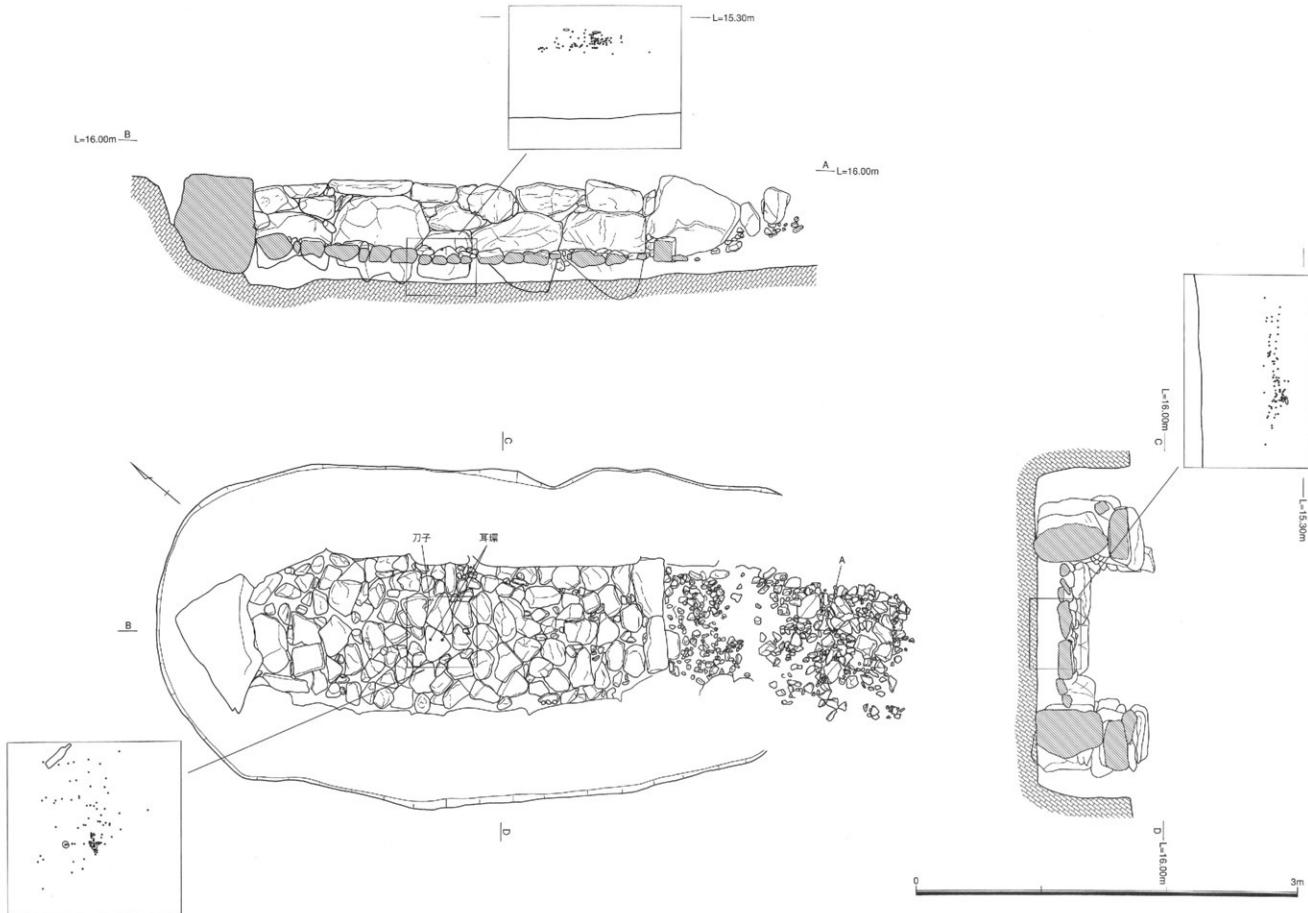


第6図 SM1001石室(第1次床面) 平・断面図





第7図 SM1001石室（第1次床面）遺物出土状況分布平・断面図（鉄器・玉類）

副葬品と思われる鉄鎌・刀子・耳環・ガラス小玉等は第2次床面上から出土しており、石室中央部から北側、特に奥壁側に分布の集中が見られた。

出土遺物（第8・9図）

副葬品は盗掘を受けており出土量は少ない。また出土状況から原位置を保っているとは考えにくい。石室内床面から土器の出土はみられず、覆土中からの出土のみであった。土器の出土は須恵器を中心に若干の土師器がみられたが、実測可能なものはなかった。これらは前庭部もしくはその周辺からの出土に限られるが、特に集中した地点などはみられない。110・111は土師器の鉢である。小さな台を有する。形態から製塙上器の可能性がある。

石室内床面からは僅かな金属器類および玉類が出土した。玉類と耳環、鉄鎌は第2次床面から出土し、鉄鎌を除く装身具類は床面のほぼ中央付近から出土した。しかし、それぞれの合わせ部分が一定ではないため、装身具の装着状態を復元するところまでは至らない。

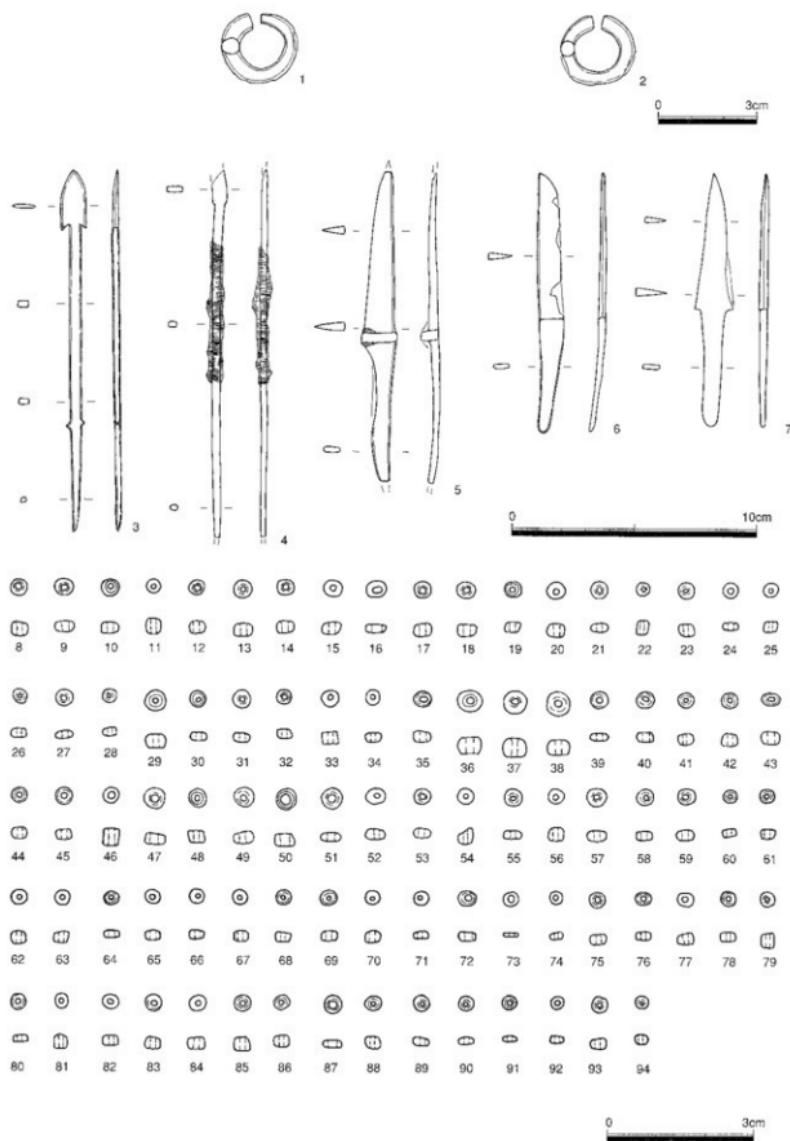
1・2の耳環は石室内ほぼ中央部の第2次床面上より出土したが、原位置は遊離している可能性が高い。耳環は銅地金胴張りで、表面は部分的に剥離しており、遺存状況は良好とは言えない。鉄器類は5点の出土があり、鉄鎌は2点出土している。3および4はいずれも棘兜被式の長頭鎌である。5～7は刀子で3点出土している。SM1001およびその周辺から出土した須恵器の年代とも併せてTK209併行段階の所産と考えられる。

3は長頭鎌である。鎌身部外形は三角形を、鎌身部断面形は両丸造を呈し、鎌身関部には逆刺を有する。頭部長は8cmを測り、頭部関部は棘状闊を呈する。茎部断面形は隅丸方形を呈する。鉄鎌3は杉山分類長頭鎌群A-V-3-1類（杉山 1988）に該当し、杉山編年X期（MT85～TK43式併行期）の年代を与えることができる。

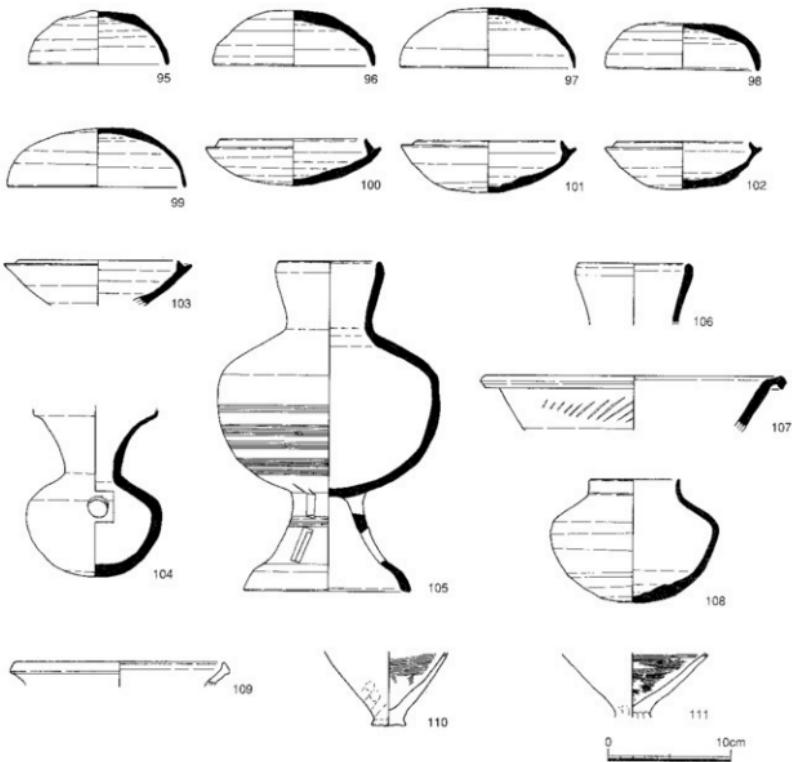
4は長頭鎌である。鎌身部外形は先端部を欠損するが三角形と推定される。鎌身部断面形は遺存する部位に刃部が観察されないことから両端刃造もしくは片切刃造と推定される。鎌身関部は撫角闊となる。頭部形状は直線状を呈し、欠損するが棘状闊と推定される。茎部断面形は不整円形を呈する。鉄鎌4は杉山分類長頭鎌群A-V-3-3類もしくはA-V-4-3類に該当し、杉山編年XI期の年代を与えることができる。頭部に木質が残るが、主軸直交方向に木目が走ることから、鉄鎌4に伴う木質ではなく、棺材等と推定される。

ガラス小玉は89点の出土があったが、2個体は小破片で実測はできなかつたため、掲載点数は87点である。8～94の玉類はすべてガラス小玉で、コバルトブルーを主とした青系統を呈するものが多く、緑色系が若干含まれる（III 自然科学分析を参照）。

須恵器は比較的多形式にわたって出土しているが量は少ない。杯、杯蓋、壺、壺類がみられる。杯は立ち上がりが短く内傾し、杯蓋はやや丸みをもつ天井部を呈する。杯、蓋ともに口径が12cm前後と法量はやや小型である。台付き壺は、球形の胴部をもち、長方形の2段透しの入った脚台をもつ。壺は口縁部が大きく開き頭部が比較的短く僅かに細い。表面は風化のために摩滅している。これらは時期的におよそ6世紀の後半があたるであろう。また、平底の杯が出土しているが、年代的に7世紀前半とやや新しい。



第8図 SM1001出土遺物1



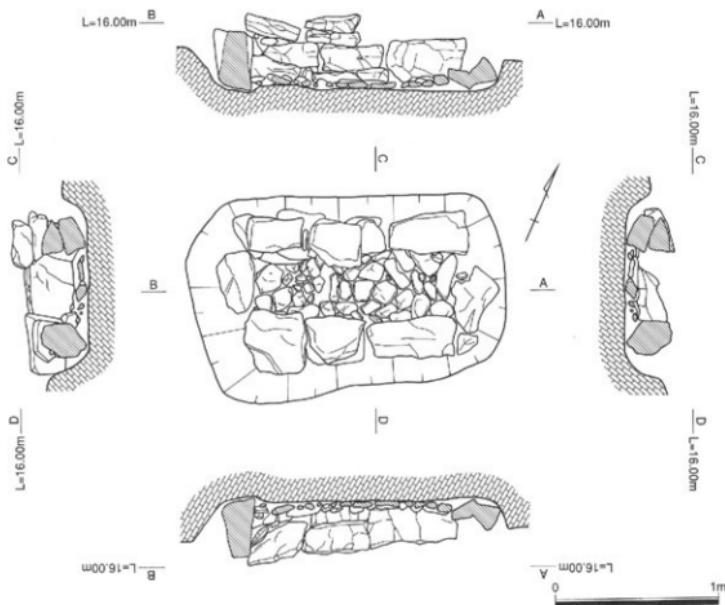
第9図 SM1001出土遺物2

ST1001（1号小豎穴式石室墓）（第10・11図）

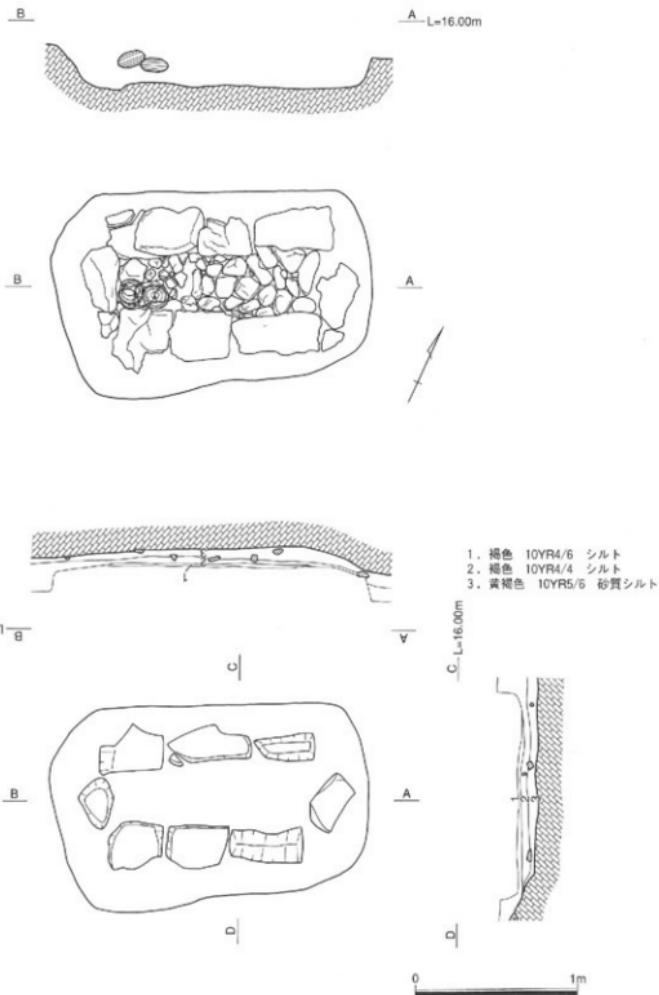
C-2グリッド、SM1001の東側に位置する小豎穴式石室墓である。SM1001同様、削平を受けているものと思われる。墓壙は隅丸長方形状を呈し、長軸1.65m、短軸1.16m、最大深度0.3mの規模を測る。

石室は天井石を消失しており、上部構造は不明である。石室石材は砂岩が使用される。ST1001は50cm前後の直方体状の角礫を用い、平積みで壁体を構築する。壁体は1～2段程度しか残存しておらず、持ち送り等の有無は確認できない。東西奥壁基底部には角礫1個を平積みで構成する。南北両側壁は3側の角礫を小口を併せて1列に並べ2段に積み上げている。石室規模は内法で長軸1.18m、短軸0.44m、石室床面からの高さは現存で0.3mを測る。主軸方向はN-66°-Eで、石室床面平面形状は東がやや広くなっていることから、東頭位であると思われる。床面にはSM1001の第1次床面に類似するような平石を墓壙基底部に敷き詰め、構築されている。

ST1001の構築時期は出土須恵器などから、SM1001よりもやや新しく6世紀後半、TK209型式併行段階の6世紀第3四半世紀頃と思われる。



第10図 ST1001平・断面図

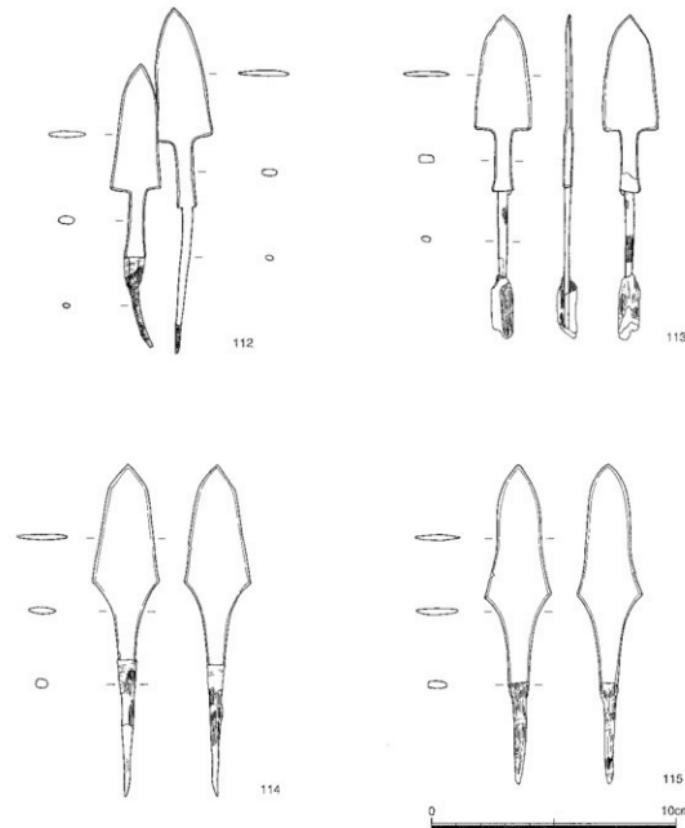


第11図 ST1001遺物出土状況平・断面および積石除去（基底部）平・断面図

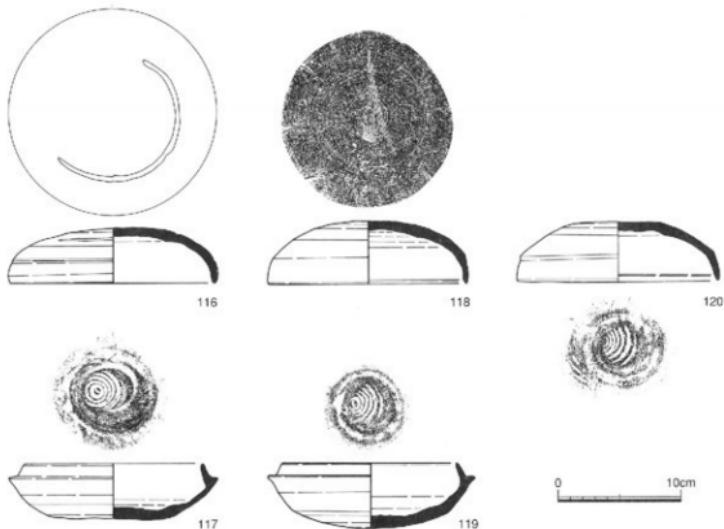
出土遺物（第12・13図）

ST1001からは全体の出土量こそ少ないものの比較的副葬品の遺存状況は良好であった。西小口南側で壁体に接するように須恵器の杯・杯蓋が組み合わされたままの状態で2組重なって出土した。鉄鎌は東小口南側で出土した。鎌身部を西側に向け、数本が銹着した状着で側壁に沿うようにして副葬されていた。鉄鎌は銹着していた状況から、一定の単位でまとめる。もしくは東ねて副葬していたものと考えられる。それぞれの遺物はおそらく副葬当時のまま元位置を保っていると思われ、埋葬時の配置の復元が可能で、被葬者の足元に杯・頭部側に鉄鎌を配していたものと考えられる。

112右は三角形鎌である。鎌身部形状は長三角形を呈し、鎌身部断面形状は両丸造りを呈し、鎌身関部は角関を呈する。角関はやや斜行するのが特徴である。頭部形は直線状を呈し、不明瞭ながらも台



第12図 ST1001出土遺物1



第13図 ST1001出土遺物 2

形閻を有する。杉山分類三角形鎌群B-II-1-1類に該当し、杉山編年XII期の年代を与えることができる。112左は三角形鎌である。鎌身部形状は長三角形を呈し、鎌身部断面形状は両丸造を呈し、鎌身閻部は角閻を呈する。角閻はやや斜行するのが特徴である。頭部形は直線状を呈し、台形閻を有する。杉山分類三角形鎌群B-II-1-1類に該当し、杉山編年XII期の年代を与えることができる。113は三角形鎌である。鎌身部形状は長三角形を呈するが、112左右鉄鎌に比べてふくらが張り気味なのが特徴である。鎌身閻部は角閻を呈する。頭部形は直線状を呈し、台形閻を有する。杉山分類三角形鎌群B-II-1類に該当し、杉山編年XI期の年代を与えることができるが、鎌身部形状の特徴から112に比べて後出すると推定される。114は三角形鎌である。鎌身部形状は長三角形を呈し、鎌身部断面形状は両丸造を呈する。鎌身部形状はふくらを有し直線状に延びるのが特徴である。頭部は斜行し、無閻である。杉山分類三角形鎌群B-I形式に該当し、杉山編年X期の年代を与えることができる。115は三角形鎌である。鎌身部形状は長三角形を呈し、鎌身部断面形状は両丸造を呈する。鎌身部形状はふくらを有し内湾するのが特徴である。頭部は斜行し、無閻である。杉山分類三角形鎌群B-I形式に該当し、杉山編年X期の年代を与えることができる。

2組の須恵器杯・杯蓋とも口径が18cm前後とやや大型のもので両者とも明瞭な回転ヘラケズリが施される。およそ6世紀後半があてられるが、SM1001出土の須恵器よりも若干新しい時期にあたると考えられる。鉄鎌は合計5点出土した。すべて平根の三角形鎌である。いずれの茎にも木質が残存しており、矢柄が装着された状態での副葬を窺わせる。ST1001の出土遺物は須恵器等から時期的にはTK209型式併行段階の6世紀第3四半世紀の所産と考えられる。

ST1002（2号小堅穴式石室墓）（第14図）

B-5グリッド、SM1001の西側に位置する小堅穴式石室墓である。後世の削半のため、大部分が崩落・消失しており、破壊が著しく正確な形状・規模などは不明である。墓擴も確認できなかった。

石室石材は砂岩が使用される。ST1002は30cm前後の直方体状の角礫を用い、平積みで壁体を構築する。壁体は基底部1段が一部残存する程度で詳細な構築状況は不明であるが、ST1001と同規模のものであった可能性が高い。石室規模は現状の内法で長軸1.10m、短軸0.44mと推定される。石室床面からの高さは不明である。主軸方向はN-5°-Wではば東西方向である。ST1001と同様、頭位は東頭位であると推測される。床面は平石を墓擴基底部に敷き詰め、構築されていたものとみられる。

ST1002の構築時期も出土須恵器などから、SM1001よりもやや新しく6世紀後半、TK209型式併行段階の6世紀第3四半世紀頃と思われる。

出土遺物

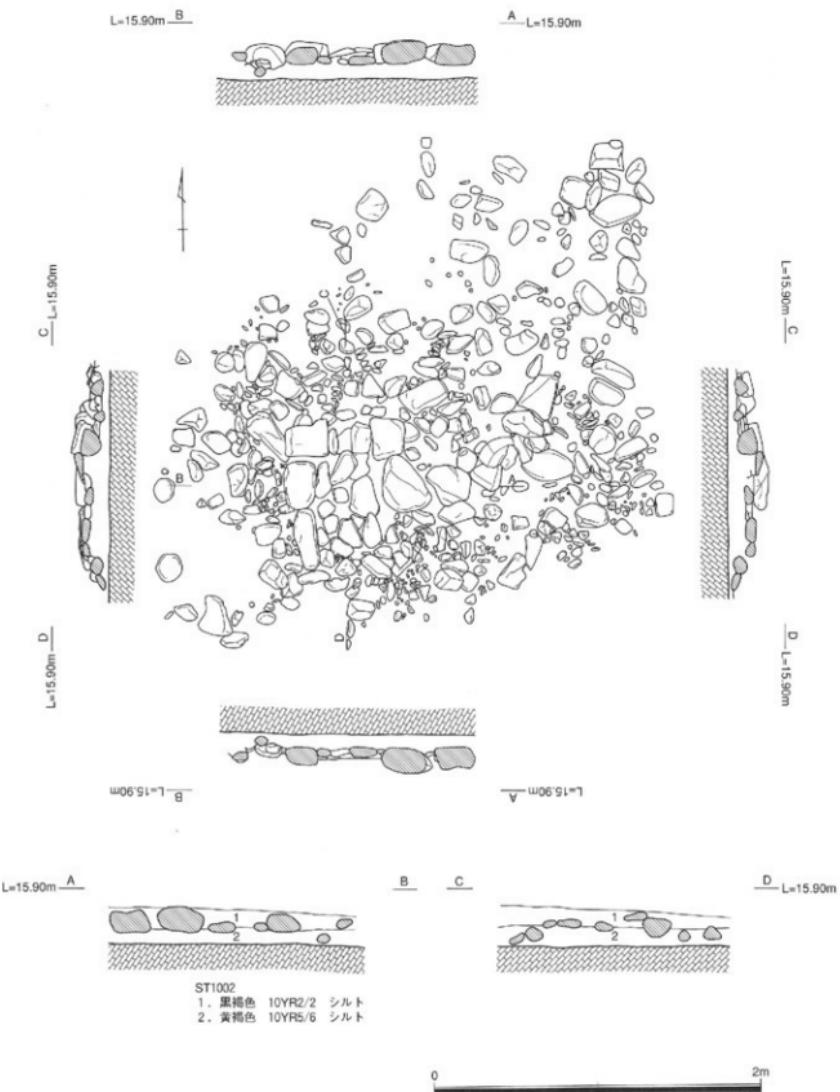
若干の須恵器片等の出土はあったが、復元・実測可能なものはなかった。

包含層出土遺物（第15図）

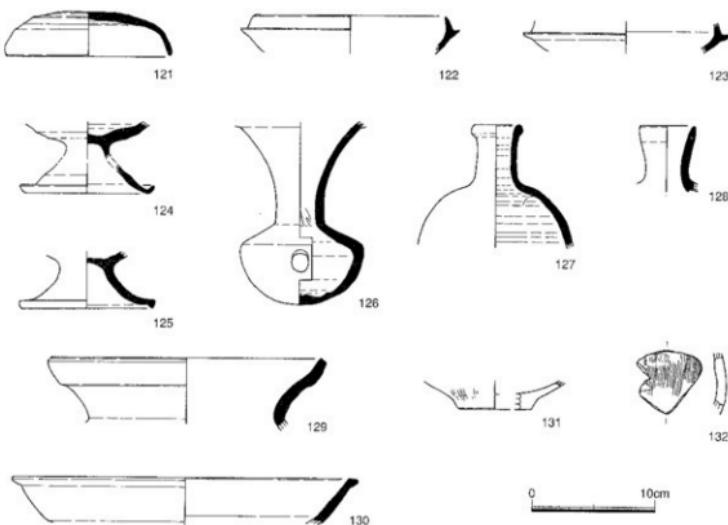
遺構外から多くの須恵器等の出土がみられた。おそらくは大部分がSM1001に帰属するものと考えられるが、遺構から明らかに遊離した遺物を包含層出土遺物として扱った。

121～130は須恵器である。121～123は杯蓋および杯身である。124・125は短脚の高杯の脚部である。126は腹である。127は陶器鉢利、128は須恵器瓶口、129は須恵器壺、130は須恵器鉢である。

131・132は弥生時代の遺物である。131は壺底部である。132は体部破片で器種は不明。時期的には弥生時代後期頃と思われる。



第14図 ST1002平・断面図



第15図 包含層出土遺物

(4)まとめ

今回の調査では砂岩を使用した横穴式石室をもつ古墳（SM1001）が1基確認された。後世の削平により墳丘および石室天井石は消失していたことに加え、基底石やその他墳丘裾を示すものが皆無であったため、おそらく円墳と思われるが古墳の形状は確認できない。しかしながら、SM1001の西側と南東側にそれぞれ1基ずつ小竪穴式石室墓（ST1001・1002）が存在しており、SM1001を主墳として、ST2基が築造され付随するという古墳群の構成をみせる。SM1001は規模的にも本古墳群構成の中心的存在であったと考えられる。出土須恵器から、SM1001は時期的にTK209型式段階に該当するため、6世紀後半頃の構築と考えられる。付隨するとみられるSTはSM1001よりもやや新しく、TK209型式併行段階の6世紀第3四半世紀頃と思われる。

本古墳群で検出された石室には石材として自然石の砂岩が用いられている。このことは東林院古墳群・かに塚・ぬか塚など、近隣に所在する当該地域の後期古墳の石室石材には砂岩が用いられる傾向をふまえているものである。また前述の後期古墳などは比較的低所に築造されており、本古墳群においても当該地域における古墳群の立地において同様の傾向をみせている。

当該地域における後期古墳は古墳の立地・形状・石室石材および主軸方向などが、類似相を見せており、石室使用石材や古墳築造の立地に関してある種の社会的規制があったものと想定される。本古墳群では立地・石室石材については当該地域の後期古墳の傾向に合致するが、主軸方向・埋葬頭位については、SM1001は北西—南東方向・北頭位、ST1001は東西方向・東頭位、ST1002は南北方向・北頭位

であり、若干の相違がみられ、主軸方向・埋葬頭位は東西を志向すると思われるものの、その規制は緩やかである。今後さらに東西主軸を志向する古墳群の規制程度とその階層範囲など立地や石室構造・副葬品の組成を含めて検討が必要である。

SM1001は大幅に削平を受けており、遺物量も豊富とはいえない。しかしながら、SM1001が築造された後にSTが2基築造されるなど古墳被葬者との関係で注目できる一方、西に隣接する尾根上には西山谷古墳群が立地していることもふまえて、当該地域における古墳群の様相の一端、時期的な立地の変遷を示す資料として重要視すべきであろう。

引用・参考文献

杉山 秀宏 1988「古墳時代の鉢鐵について」『櫛原考古学研究所論集』8 奈良県立櫛原考古学研究所

大谷山田遺跡

第1表 出土遺物一覧表

SM

遺物名	グリッド	出土地點	基盤平面 形態	基盤側面 形態	形成状態	基盤厚さ (mm)	基盤深さ (mm)	石室長軸 (mm)	石室短軸 (mm)	石室厚度 (mm)	石室高さ (mm)	石室底面 (mm)	側面長軸 (mm)	側面短軸 (mm)	側面高さ (mm)	南北方位	東西方位	備考
SM1001	C-D-3-4	4便	直接埋入形	直立状 (浅 いV字形)	5.0	2.67	0.83	4.9	1.1	0.6	3.15	0.9	N-36°-W	W	北東の斜坡 に直接埋入。			

ST

遺物名	グリッド	出土地點	基盤平面 形態	基盤側面 形態	形成状態	基盤厚さ (mm)	基盤深さ (mm)	石室長軸 (mm)	石室短軸 (mm)	石室厚度 (mm)	石室高さ (mm)	支體方向		備考
ST1001	C-2	積丸形埴込 (深いV字形)	1.65	1.6	0.3	1.16	0.44	0.3	N-66°-E				小形穴式玄室。	
ST1002	B-6					1.1	0.41					N-7°-W		小形穴式玄室。

第2表 出土遺物觀察表

SM (青銅器)

登録番号	品種	出土地點	層位	部類	大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の記述 (cm)	残存率	形状	備考
1 SM001	刀身	2便	2.2	2.3	0.6	7.2				1/1	圓錐形刀身。	圓錐形刀身。
2 SMC004	刀身	2.2	2.3	0.6	6.4					1/1	圓錐形刀身。	圓錐形刀身。

SM (鉄器)

登録番号	品種	出土地點	層位	部類	大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の記述 (cm)	残存率	形状	備考
3 SM2001	C-4	第2火床裏面ト	鉢	17.4	1.0	0.3	10.4			1/1		
4 SM3001	C-4	第2火床裏面ト	鉢	15.1	0.6	0.4	9.1			9/10		
5 SM3001	C-6	第2火床裏面ト	刀子	12.7	1.5	0.4	14.0			9/10		
6 SM2001	D-3	第2火床裏面ト	刀子	10.5	1.0	0.3	15.4			9/10		
7 SM3001	D-3	第2火床裏面ト	刀子	10.5	1.5	0.6	16.4			9/10		

ST (鉄器)

登録番号	品種	出土地點	層位	部類	大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の記述 (cm)	残存率	形状	備考
112 ST1001	C-2		鉢	11.8	2.3	0.6	34.9			1/2		
					14.2	2.2	0.5					2倍。
113 ST1001	C-2		鉢	13.2	2.3	0.4	15.7			9/10		
114 ST1001	C-2		鉢	13.6	2.8	0.3	13.5			1/1		
115 ST1001	C-2		鉢	13.1	3.7	0.3	15.7			1/2		

SM (玉類)

登録番号	種類	出土地點	層位	材質	形状	径 (mm)	横径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	F級 (mm)	その他の記述 (mm)	残存率	形状	備考
6 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.6	3.4	3.1	0.06	1.2				に長い縦溝。	
9 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.7	3.1	2.5	0.06	1.5				に深い縦溝。	
10 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.6	3.4	2.8	0.04	1.2				に長い横溝。	
11 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.0	3.0	3.6	0.04	1.7				に深い横溝。	
12 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.4	3.1	2.9	0.04	1.5				に深い横溝。	
13 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.7	3.9	2.5	0.06	1.2				に深い横溝。	
14 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.6	3.1	2.5	0.03	1.2				に深い横溝。	
15 SM1001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.8	3.5	2.6	0.03	1.2				あるいは横溝。	
16 SM1001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	4.2	3.3	2.1	0.02	2.3				あるいは横溝。	
17 SM1001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.5	3.4	1.7	0.01	1.2				あるいは横溝。	
18 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.8	3.5	2.7	0.04	1.3				に長い縦溝の鏡。	
19 SM1001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.5	3.1	2.2	0.03	1.2				くらら、骨。	
20 SM001	鏡子	第2火床裏面ト	鏡子	小玉	3.7	3.4	2.1	0.06	1.5				土・圓錐形に凹凸。	
21 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	2.5	2.4	1.9	0.08	1.2				あるいは横溝。	
22 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	2.8	2.8	2.0	0.04	0.7				骨。	
23 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.5	3.2	2.7	0.04	1.1				骨。	
24 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.2	3.2	1.6	0.02	1.1				骨。	
25 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.1	3.0	2.3	0.04	1.0				骨。	
26 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.1	2.9	2.0	0.08	0.9				骨。	
27 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.5	3.4	1.5	0.02	1.4				骨。	
28 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.0	2.8	1.8	0.02	0.8				骨。	
29 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	4.2	4.1	3.0	0.07	1.0				骨。	
30 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.4	3.3	1.8	0.03	1.0				上端・下端凹。	
31 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.5	3.5	2.0	0.08	1.1				上端・下端凹。	
32 SM001	D-3	第1火床裏面ト	鏡子	小玉	3.1	3.0	2.0	0.03	1.2				骨。	
33 SM1001	鏡子	小玉	3.8	3.2	2.7	0.04	1.5						骨。	
34 SM1001	鏡子	小玉	3.1	2.9	2.0	0.02	1.0						上端・下端凹。	
35 SM1001	鏡子	小玉	3.7	3.4	2.2	0.04	1.6						あるいは横溝の骨。	
36 SM1001	鏡子	小玉	3.0	4.7	3.2	0.11	.5						骨。	

船名	登録番号	出港地	号	材質	卸港	長さ(m)	幅さ(m)	厚さ(m)	重さ(t)	吃水(m)	干舷(m)	積載量(t)	残存率	備考
37	SM1001			鋼	小	4.9	4.8	4.0	0.32	1.7				くろい青。
38	SM1001			鋼	小	5.0	4.9	3.2	0.31	1.5				くろい青。
39	SM1001			鋼	小	5.5	3.3	1.6	0.08	1.5				にぶい青緑。
40	SM1001			鋼	小	5.6	3.5	2.0	0.08	1.5				あらい青緑。
41	SM1001			鋼	小	3.3	3.0	2.3	0.03	0.9				あらい青緑。
42	SM1001			鋼	小	3.5	3.2	2.5	0.05	1.1				にぶい青緑。
43	SM1001			鋼	小	3.7	2.8	2.8	0.06	1.8				にぶい青緑の青。
44	SM1001			鋼	小	3.1	3.0	2.1	0.03	1.0				にぶい青緑の青。
45	SM1001			鋼	小	3.5	3.2	2.0	0.02	1.1				にぶい青緑の青。
46	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.6	3.6	3.5	0.05	1.4				青緑。
47	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	4.2	4.1	2.3	0.06	1.7				青緑。
48	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.8	3.8	2.5	0.05	1.2				青。
49	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	4.1	4.0	2.5	0.06	1.1				礁の青。
50	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	4.2	4.1	2.5	0.05	1.8				礁の青。 上部(2)翠翠。
51	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	4.1	4.0	1.8	0.04	1.7				好みの青。
52	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	4.0	3.2	2.2	0.04	1.0				青緑。
53	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.7	3.3	2.0	0.04	1.2				青緑。
54	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.4	3.2	3.5	0.04	1.1				青緑。
55	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.7	3.5	1.5	0.03	1.0				青緑。
56	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.5	3.0	2.8	0.04	1.1				青。
57	SM1001		第2次(2)米南上	鋼	小	4.0	3.4	2.0	0.03	1.1				青緑。
58	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.5	3.5	2.0	0.03	1.2				にぶい青緑の青。
59	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.8	3.4	2.3	0.04	1.3				にぶい青緑の青。
60	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	2.8	2.8	1.9	0.02	1.0				あらい青緑。
61	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	2.9	2.1	0.03	1.3				あらい青緑。
62	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.0	2.8	0.04	1.3				にぶい青緑。
63	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.1	3.1	2.7	0.04	1.1				にぶい青緑。
64	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.4	2.9	1.7	0.02	1.2				うすい青緑。
65	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.1	3.0	2.2	0.02	1.0				あらい青緑の青。
66	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.0	2.2	0.03	1.3				うらう青緑。
67	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.1	3.1	2.0	0.03	1.2				あらい青緑。
68	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.3	3.2	2.7	0.02	1.2				くらう青緑の青。
69	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.8	3.2	2.5	0.03	1.1				あらい青緑。
70	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.1	3.0	2.7	0.02	1.1				あらい青緑。
71	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.1	2.9	1.8	0.02	1.2				うらう青緑。
72	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.7	3.4	2.2	0.02	1.3				あらい青緑の青。
73	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.0	1.0	0.04	1.6				シロ。
74	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	2.9	2.9	1.5	0.02	1.0				上向(下逆回)。
75	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.4	3.5	2.0	0.03	0.9				にぶい青緑。
76	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.1	2.8	1.9	0.02	1.0				にぶい青緑。
77	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.3	2.9	2.3	0.03	1.2				にぶい青緑。
78	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.0	3.0	2.0	0.02	0.9				にぶい青緑。
79	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	2.9	2.9	3.1	0.03	0.8				にぶい青緑。
80	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.4	3.0	1.2	0.02	1.0				あらい青緑。
81	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.0	2.9	2.0	0.03	1.0				あらい青緑。
82	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.0	2.0	0.02	1.0				にぶい青緑。
83	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.0	2.0	0.02	1.0				あらい青緑。
84	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.5	3.2	2.6	0.03	1.2				にぶい青緑。
85	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.5	3.3	2.5	0.03	1.2				あらい青緑。
86	SM1001		第1次(2) 米南上	鋼	小	3.5	3.2	2.6	0.03	1.2				にぶい青緑。
87	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.3	3.7	1.6	0.03	1.8				緑。
88	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.5	3.0	2.5	0.04	0.9				青緑。
89	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.6	3.3	2.0	0.03	1.2				青緑。
90	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.0	1.3	0.02	1.1				青緑。
91	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.0	3.0	1.0	0.01	1.1				青緑。
92	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	2.8	2.8	1.3	0.02	1.0				青緑。
93	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	3.2	3.1	2.2	0.04	1.1				青緑。
94	SM1001	D-3	第1次(2) 米南上	鋼	小	2.9	2.9	2.0	0.02	0.9				青緑。

SM (土器)

品目番号	造 品	出力馬力	倍 率	苏 保	現存率	以 後 cm	最 大 cm	後 cm	前 cm	前部 後部 cm	その他の 後部 cm	前部	移 换	回 転	合成油 合成	有 体	考	
95	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 9/10	11.5				4.4						石英・純 油	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒不良	
96	SM1001	C-4		標準型 軽量	全搭 2/3		13.0			4.8						石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒不良	
97	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 10/12 10/12	16.4				4.8						石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒不良	
98	SM1001	C-3		標準型 軽量	全搭 1/1	13.6				3.8						石英・純 油	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒不良 6C 仕様	
99	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 7/12 7/12	14.4				4.8						石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒不良	
100	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 全搭 9/10	12.2				3.8						石英・純 油	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒不良 6C 仕様	
101	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 9/10	12.2				2.4						石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好 6C 仕様	
102	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 5/5	11.1				4.0						石英・純 油	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好 6C 仕様	
103	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	口搭 3/4	13.0	15.4			3.7						石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好	
104	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 8/10	10.2				1.6	4.6	13.7				石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好	
105	SM1001			標準型 軽量	全搭 1/2	8.6	18.1	13.2	7.5	26.3	7.8					石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好	
106	SM1001	C-3-t	4馬	標準型 軽量	口搭 5/4	9.0				3.1			L換輪	輪胎は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。内 部構造は外見と 全く同じである。 輪轂は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。内 部構造は外見と 全く同じである。			石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好
107	SM1001	C-4		標準型 軽量	口搭 1/11	34.0	25.0			2.7			輪轂	輪轂は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。内 部構造は外見と 全く同じである。			石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好
108	SM1001	C-4	4馬	標準型 軽量	全搭 1/1	7.5				3.8			全搭	輪轂は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。内 部構造は外見と 全く同じである。			石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好
109	SM1001	C-4	3馬	標準型 軽量	口搭 1/15	17.0	17.95			2.1			輪轂	輪轂は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。			石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好
110	SM1001	D-3		標準型 軽量	全搭 既定 仕様 完成					2.8			軸轂	軸轂は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。			石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好
111	SM1001	D-3		標準型 軽量	不明					5.4			小軸	軸轂は既に付 し てあるが、輪轂は取 り外してある。			石英	軽油 内燃: 汽油 外燃: 柴油 燃燒良好

ST (土器)

登録番号	造 構	出土地點	層 位	器 形	碎 状	口 径 (cm)	腹 径 (cm)	底 径 (cm)	通體 高 (cm)	縁高・底高 (cm)	その他の記述 (cm)	部位	形 異	調 渡	主 著 特 徴	外 説	備考	
118	ST1001	C-2	4層	直筒器 平底	全形 9.2	17.1					4.6	全体					虎皮目好。	
																大井掛窯工 に于ける主 要な器形。		
117	ST1001	C-2	3層	直筒器 平底	全形 9.1	14.8			8.2		4.6	全体				内面：虎皮目好。	内面：虎皮 目好。	
																内面：ロクロナ。	外面：ロクロナ。	
118	ST1001	C-2	3層	直筒器 平底	全形 9.2	16.4					5.2	全体				外面：虎皮目好。	外面：虎皮 目好。	
																内面：ロクロナ。	内面：ロクロナ。	
119	ST1001	C-2	3層	直筒器 平底	全形 9.1	14.5	17.1	3.9			5.4	全体				外面：虎皮目好。	外面：虎皮 目好。	
																内面：ロクロナ。	内面：ロクロナ。	
120	ST1001	C-2	3層	直筒器 平底	全形 9.1	16.6					5.0	全体				外面：虎皮目好。	外面：虎皮 目好。	
																内面：ロクロナ。	内面：ロクロナ。	

包含層 (土器)

登録番号	造 構	出土地點	層 位	器 形	碎 状	口 径 (cm)	腹 径 (cm)	底 径 (cm)	通體 高 (cm)	縁高・底高 (cm)	その他の記述 (cm)	部位	形 異	調 渡	主 著 特 徴	外 説	備考	
121		C-3	4層	直筒器 平底	全形 4.5	13.3	13.3			3.7		全体				外面：ロクロナ。	外面：虎皮目好。	
															内面：ロクロナ。	内面：虎皮 目好。		
122	165 トレンチ	山根遺跡	5層 人骨埋蔵	直筒器 平底	口徑 1/14	15.8	18.0			3.1		上部 破損				外面：ロクロナ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ロクロナ。	内面：虎皮 目好。		
123	165 トレンチ	山根遺跡	6層 人骨埋蔵	直筒器 平底	口徑 1/12	16.8				2.6		全体				外面：ロクロナ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ロクロナ。	内面：虎皮 目好。		
124		H-1	3層	直筒器 平底	全形 1.6 底高 0.5				10.0	3.5	5.9	底部				外面：虎皮目好。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ナガ。	内面：虎皮 目好。		
125		C-3		直筒器 高脚	断面 3.1				10.3	4.7	燕高 3.5	底部				外面：ナガ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ナガ。	内面：虎皮 目好。		
126	365 トレンチ			伊藤器 L型 底高 0.5					16.1	1.6	3.8	15.1	庄孔 2cm			外面：ナガ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ナガ。	内面：虎皮 目好。		
127	169 トレンチ		杏上原	直筒器 高脚	口徑 1/10	3.6				3.2	10.2	上部 破損				外面：ナガ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ナガ。	内面：虎皮 目好。		
128	165-7 トレンチ			直筒器 高脚	口徑 1/10	4.4	6.65		3.45	3.4		二脚部				外面：ロクロナ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ロクロナ。	内面：虎皮 目好。		
129	C-3	4層	直筒器 高脚	口徑 1/10		22.0			16.0	5.9		上部 破損				外面：ロクロナ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ロクロナ。	内面：虎皮 目好。		
130	C-3	4層	直筒器 高脚	口徑 1/10		27.3				3.6		上部 破損				外面：ロクロナ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ロクロナ。	内面：虎皮 目好。		
131	B-4	4層	直筒器 高脚	口徑 1/3					6.0	2.4		底部				外面：ミガキ (2mm)。 内面：ナガ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ナガ。	内面：虎皮 目好。		
132	165 トレンチ	山根遺跡	工具 人骨埋蔵	直筒器 小柄	内面 人骨							底部 不明				外面：ハケ。	外面：虎皮 目好。	
															内面：ハケ。	内面：虎皮 目好。		



XX 大代古墳



例　　言

1 本章は四国横断自動車道建設に伴う大代古墳の発掘調査報告書である。

2 所在地　鳴門市大津町大代字日開谷1482-2他

3 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

　発掘調査期間　平成12年3月1日～平成12年3月31日　1,035m²

　平成12年4月1日～平成12年11月30日　1,730m²

　調査対象面積2,765m²

　調査面積440m²

　試掘面積260m²

　報告書作成期間　平成16年4月1日～平成17年3月31日

4 遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。ただし第71図の遺物番号は図幅において通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5 本遺跡の地理的・歴史的環境については、「II 調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6 ST1001箱式石棺および大代古墳出土鉄器の一部については栗林誠治が、大代古墳のトレンチ出土埴輪の一部および「まとめ 塩輪について」については藤川智之が報告を行った。また大代古墳の現地保存についての報文は湯浅利彦が執筆した。

1 調査の経過

(1) 調査の経過

調査着手前、遺跡は山林に覆われていた。大代古墳は阿讃山脈東端南麓から南へ派生する鳴門市大津町大代の標高40～47mの尾根上に所在する。この地域は宮谷古墳（前方後円墳）の所在する徳島市国府町の気延山周辺と並び、周辺一帯には多数の古墳群が密集する地域として周知され、以前から古墳群の存在が指摘されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が高まつた。

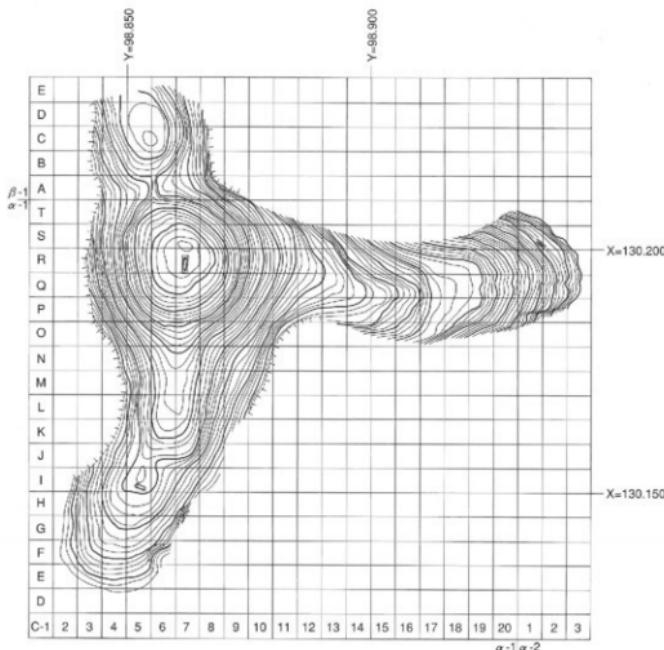
したがって、四国横断自動車道建設に伴い、分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,730m²を調査対象面積として設定した。平成11年11月に大部の用地が取得されたため、平成12年1月末に調査に係る立木伐採範囲の設定作業を実施した。引き続き平成12年3月1日～平成12年3月31日の期間、試掘調査を設定・実施し、平成12年3月10日に山林伐採終了後の調査区確認を目的とする現地立会によって古墳群の存在が初めて明らかになった。

平成11年度は調査範囲の確定を主眼におき、まず現況の地形測量を実施するにとどめた。地形測量が進捗するに従い、これまで知られていなかった前方後円墳を含む3基の古墳群の存在が明らかとなつた。確認された前方後円墳の名称は「大代古墳」とした。

センターは直ちに文化財課と協議を行い、3月16日にJH徳島工事事務所において現状保存を申し入れ、事務レベルの協議を開始した。これと併行して文化財課は文化庁記念物課との協議を実施した。3月31日当該用地の取得が完了したため、4月11日より築造年代・主体・外表施設、保存を要する範囲確認のための調査を開始した。この後、調査経過を踏まえつつ、文化財課・センター・JH四国支社・JH徳島工事事務所・県高速道路推進局は保存に起因する諸課題について協議を重ねた結果、9月の現地説明会段階において、トンネル工法（片側3車線の双股トンネル）に構造変更して現状保存されることが決定した。大代古墳は保存・整備作業が実施され、現在、下を通るトンネルは「大代古墳トンネル」と呼称されている。

(2) 発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第IV系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南北隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第1図 グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

大代古墳調査日誌抄

2000年

3月1日 事務所引越し。

3月3日 事前準備。

3月8日 トレンチ掘削開始。図面作成。

3月13日 図面作成。調査区整備。

3月30日 図面整理。

3月31日 事務所引越し。

4月3日 辞令交付式。調査準備。

4月6日 現地形平板測量。

4月11日 入力掘削開始。調査前風景空中写真撮影。Aトレンチ掘削開始。

4月12日 A~Fトレンチ掘削、土層図作成。

4月19日 東尾根部分全操作業。



4月27日 東尾根部平面発掘。前方後円墳東側後円部墳丘斜面にGトレンチを設定し、調査を開始する。墳丘基底部を検出し、その外側テラス面上に円筒埴輪底部が原位位置を保った状態で検出。

4月28日 東尾根部Q-12~Q-13区抜張区完掘、写

	真撮影。B～C トレンチ付近拡張区完 成。G トレンチ掘削。前方後円墳、墳丘 部各トレンチ設定。	定、表土剥ぎ開始。
5月1日	前方後円墳、後円部東斜面 G トレンチ 完掘。K、L、M トレンチ掘削開始。 (～2 H)	5月30日 1号墳墳丘地形平面図 (S=1/200) 再 作成。
5月8日	K、L、M、N、J トレンチ掘削。K トレン チより敷石、土器片出土。	6月1日 1号墳表土、流土除去作業。H トレンチ 北拡張区、L トレンチ拡張区より埴輪片 多数出土。
5月9日	H トレンチ掘削。北側円墳墳丘部各トレン チ設定。前方後円墳墳丘部西側トレン チ設定。	6月5日 1号墳、2号墳流土除去作業。P トレン チ拡張区より埴輪片多数出土。
5月11日	G トレンチ埴輪基底部半裁土層図作成。 登山道整備。	6月7日 1号墳墳頂部造り形測量の設定、全景写 真、流土除去、盜掘坑壁上掘削除去開始。 墳頂部盜掘坑にて直径9.4cmの鏡（青銅 製品）の破片が出土。
5月12日	K トレンチ拡張区設定。K トレンチ下部 より敷石が出土。G トレンチ埴輪基底部 写真撮影。	6月8日 1号墳墳頂部盜掘坑埋土除去、墳頂部周 辺土糞設置作業。墳頂部盜掘坑にて鏡が 1点、その他鉄製品が出土。
5月16日	P、Q、R、H トレンチ、L トレンチ北側 拡張区、N トレンチ西側拡張区掘削。G トレンチ埴輪基底部配置平面図作成。	6月12日 1号墳墳頂部盜掘坑壁上除去、後円部墳 頂主体部、盜掘坑埋土より鉄錠等出土。 P トレンチより埴輪基底部が出土。1号 墳後円部墳頂主体部、盜掘坑壁上より石 棺の一部が出土し始める。
5月17日	S、H、R、Q トレンチ拡張区設定。J、 G、M、P、L 掘削。Q トレンチ下部よ り敷石が出土。	6月13日 2号墳墳頂部より北側へ地形調査 (S= 1/200)。
5月18日	K トレンチ拡張区、S、H、R、Q、P、 R トレンチ掘削。Q トレンチ拡張区設 定。	6月26日 1号墳墳頂部盜掘坑全掘開始。後円部墳 頂主体部③-④区間盜掘坑壁上（ベルト 部）中より、青銅鏡片が1点出土。2号 墳墳頂部拡張区設定、表土除去。
5月19日	S トレンチ中央部より円筒埴輪基底部が 出土。	6月27日 1号墳後円主体部盜掘坑埋土ベルト除 去。銅鏡が1点出土。1号墳後円主体部 盜掘坑ベルトより石器が出土。
5月22日	K、R、Q トレンチ拡張区、S、P、H ト レンチ掘削。L、G トレンチ拡張区設定。 S トレンチより埴輪基底部出土。	6月30日 1号墳後円主体部盜掘坑ベルト除去、精 査。①区より青銅器片、②区より鉄錠等 が出土。
5月24日	Q、L トレンチ拡張区掘削。G トレンチ 拡張区設定。	7月4日 1号墳後円主体部盜掘坑完掘状況写真。 銅鏡1点出土。
	W、V、U、T トレンチ設定。G トレン チおよびQ トレンチより埴輪基底部出 土。	7月5日 1号墳前方部トレンチ設定流上除去。2 号墳拡張区設定表上除去。3号墳前年度 トレンチ拡張区設定表土除去。2号墳拡 張区設定表土中より片岩が出土。
5月25日	L トレンチ北拡張区、G トレンチ拡張 区、P トレンチ南拡張区、M トレンチ 西拡張区掘削。1号墳墳頂部調査区設	

- 7月7日 1号墳後円主体部盜掘坑埋土除去（石棺内盜掘坑埋土除去開始。墓壙埋土掘り下げ開始。）1号墳前方部トレンチ流土除去。2号墳拡張区流土除去。3号墳にて主体部を一部検出。円筒埴輪基底部？1基検出。平成11年度トレンチ拡張区より埴輪基底部が出土。1号墳後円主体部盜掘坑より鐵製1点、水銀朱（石棺内盜掘坑裡土）が出土。1号墳後円主体部盜掘坑完掘状況半面図（S=1/10）作成。
- 7月10日 3号墳（前年度トレンチ拡張区）流土除去。（主体部を全面検出するための調査区拡張）1号墳後円主体部石棺内（最下層黒色腐葉土）より管玉および白玉等が出土。
- 7月11日 2号墳拡張区流土除去終了。周辺部土囊撤去。
- 7月12日 1号墳後円主体部石棺内盜掘坑埋土、十層堆積状況写真撮影。1号墳後円主体部石棺内土層断面図作成。2号墳完掘状況写真撮影。1号墳石棺内盜掘坑埋土①、②区掘り下げ開始。
- 7月13日 1号墳後円主体部石棺内盜掘坑埋土ベルト除去。前方部トレンチ流土除去。3号墳主体部盜掘坑埋土除去。3号墳主体部遺構検出状況写真。W・Jトレンチ拡張区表土、流土除去。
- 7月14日 1号墳後円主体部石棺内盜掘坑埋土除去。墓壙覆土除去。2号墳頂部トレンチ平面図（S=1/10）作成。
- 7月17日 1号墳後円主体部石棺内盜掘坑埋土除去。墓壙内覆土除去。前方部トレンチ流土除去（遺構内半掘）。3号墳主体部覆土半掘開始。Mトレンチ精査。Nトレンチ流土除去。J、Mトレンチ拡張区より葺石が出土。1号墳石棺内盜掘坑完掘状況写真。
- 7月18日 1号墳後円主体部石棺内埋土除去。墓壙
- 内埋土除去。J、Mトレンチ拡張区設定。1号墳後円主体部石棺内より管玉が26点出土。朱のサンプル採集。石棺内作業風景写真撮影。
- 7月19日 1号墳後円主体部墓壙内埋土除去。前方部トレンチベルト除去。3号墳前年度トレンチ拡張区流土除去。
- 7月21日 3号墳主体部精査、半掘状況写真。
- 7月24日 前方部J-1トレンチベルト除去。3号墳主体部墓壙内埋土除去。前年度トレンチ拡張区流土除去。
- 7月25日 1号墳拡張区設定、表土剥ぎ、埋土除去。後円主体部墓壙内埋土除去。
- 7月26日 1号墳後円主体部拡張区設定、表土剥ぎ。後円主体部墓壙再設定、埋土除去。3号墳主体部（Bトレンチ）L字掘削。Cトレンチ拡張区流土除去。
- 7月27日 文化庁より伊藤文部技官来訪。Cトレンチより葺石が数点出土。
- 7月28日 1号墳後円主体部墓壙内埋土除去、精査。Cトレンチ表土除去。
- 7月31日 1号墳後円主体部第2墓壙埋土除去。3号墳Bトレンチ流土除去。Bトレンチより石列が出土。
- 8月1日 1号墳第1主体部廻床検出作業。第2主体部土層堆積状況写真撮影、土層図作成。Lトレンチ北拡張区、Wトレンチ東拡張区表土除去。3号墳BトレンチL字掘削下層部写真撮影、土層堆積状況写真、作図。Dトレンチ流土除去。E・Fトレンチ、Cトレンチ拡張区表土除去。
- 8月2日 1号墳後円部第1主体部墓壙、廻床検出作業。第2主体部墓壙内埋土除去。Lトレンチ北拡張区、Wトレンチ東拡張区表土除去。3号墳Bトレンチ掘削、C・D・E・Fトレンチ流土除去。Wトレンチ東拡張区流土内より埴輪片が数点出土。
- 8月3日 第2主体部完掘状況写真、遺物出土状況

- 写真撮影。
- 8月4日 1号墳後円部第1主体部、第2主体部及び調査区内精査、写真撮影。Wトレーニング区東拡張区流土除去。3号墳Bトレーニング区平面図作成。Cトレーニングより石列が出土、拡張区設定。
- 8月7日 1号墳後円部主体部及び墓壙ベルトはずし、精査、完掘状況写真。Dトレーニングより石列が出土。3号墳調査区内トレーニング配置図(石列含む)作成。
- 8月8日 1号墳後円部主体部、埠上除去及び精査。S、L、Wトレーニング区流土除去。
- 3号墳B・C・D・Eトレーニング区流土除去。
- 8月9日 岡山県倉敷考古館長 間壁忠彦氏来訪。
Sトレーニング拡張区より埴輪基底部が出土。Sトレーニング完掘状況写真撮影。
- 8月10日 同志社大学名誉教授 森浩一氏来訪。空撮準備作業。
- 8月11日 1号墳後円部主体部、ブーム空中写真撮影。
- 8月17日 鳴門市教育長来訪。1号墳後円部主体部拡張区設定、表土剥ぎ。Sトレーニング精査。Wトレーニング拡張区設定、表土剥ぎ。
- 8月18日 1号墳後円部主体部拡張区、Wトレーニング区流土除去。3号墳C・D・Eトレーニング区流土除去。Aトレーニング精査、完掘状況写真撮影。
- 8月21日 調査区拡張のためのくい打ち作業。
- 8月22日 1号墳後円部主体部拡張区表土、流土除去。Wトレーニング拡張区流土除去。3号墳C・D・Eトレーニング区流土除去。Fトレーニング精査。Cトレーニング完掘状況写真撮影。Wトレーニングより全景写真。
- 8月23日 1号墳後円部主体部拡張区表土、流土除去。Lトレーニング区流土除去。3号墳C・Dトレーニング区流土除去。
- 8月25日 石棺、周辺礫床断ち割り掘削。W、Lトレーニング区流土除去。3号墳Cトレーニング区流土除去。3号墳D・Eトレーニング区流土除去。
- 8月28日 1号墳後円部主体部礫床断ち割り、精査。石棺立面図作成。Lトレーニング区流土除去。
- 8月29日 1号墳Lトレーニング区流土除去。3号墳D・Eトレーニング区流土除去、精査。
- 8月30日 1号墳W、Lトレーニング区流土除去。3号墳面図作成。東尾根部登坂道整備。
- 8月31日 1号墳石棺平面図作成。Lトレーニング区流土除去。
- 9月1日 Wトレーニング区流土除去。3号墳Cトレーニング平面図作成。
- 9月4日 鳴門市長来訪。1号墳W、Lトレーニング区流土除去。N、Vトレーニング区設定。Xトレーニング設置。現地説明会用見学道整備。
- 9月5日 マスコミ取材(11社)のための準備作業。
- 9月6日 文化庁、内政文部技官が来訪。1号墳L、S、W、Nトレーニング区表土除去。Xトレーニング表土除去。
- 9月7日 Nトレーニング区精査。Xトレーニング区流土除去。墳頂部整備。Nトレーニング石列出土状況写真。
- 9月8日 Wトレーニング区設定。調査区内見学道整備完了。
- 9月11日 現地説明会準備。
- 9月16日 現地説明会(約300名入場)。
- 9月17日 現地説明会(約1100名入場)。約1600名が見学(学識者200名、一般1400名)。
- 9月18日 現地説明会会場撤収。1号墳L、W、Sトレーニング区流土除去。Gトレーニング表土除去。G、L、Wトレーニングより埴輪片が多数出土。
- 9月20日 3号墳主体部蓋石除去、埋土除去。4号墳主体部表土除去、石棺(箱式)蓋石出土。

- 9月21日 1号墳主体部石棺周囲礫床取り外し。
K、J、Yトレントレーナー拡張区流土除去。3号墳G・Hトレントレーナー流土除去。4号墳主体部表土除去、箱式石棺検出状況写真。
- 9月22日 1号墳主体部礫床取り上げ。石棺立面図作成。4号墳主体部平面図作成。
- 9月25日 東京国立博物館 原史室長 古谷毅氏來訪。3号墳主体部墓壙埋土除去。4号墳蓋石除去。(~26日)
- 9月26日 4号墳主体部埋土除去。IIトレントレーナー表土除去(南側)。4号墳主体部より鉄刀が出土。
- 9月27日 1号墳後円主体部礫床取り上げ。U、L、Wトレントレントレーナー拡張区流土除去。Tトレントレーナー流土除去。3号墳G・Bトレントレーナー精査、写真。4号墳主体部精査。調査区外トレントレーナー表土、流土除去。
- 9月28日 4号墳主体部精査、鉄刀取り上げ、写真、完掘状況平面図作成。調査区内整備。
- 10月2日 大代古墳保存範囲ポイント設定。ポイント図(S=1/400)作成。
- 10月3日 1号墳主体部完掘状況写真。調査区全景完掘状況写真。Pトレントレーナー流土除去。
- 10月4日 1号墳Gトレントレーナー拡張区設定、表土除去。L、W、N、Qトレントレーナー精査。3号墳Dトレントレーナー拡張区流土除去。4号墳主体部墓壙埋土除去。空撮に伴う調査区整備。
- 10月6日 1号墳、2号墳、3号墳、4号墳空中写真撮影。
- 10月10日 1号墳主体部清掃(石棺等)レプリカ作成に伴うもの。Zトレントレーナー表土、流土除去。Tトレントレーナー拡張区流土除去。Wトレントレーナー清掃、精査。4号墳主体部墓壙流土除去、側石除去。
- 10月11日 1号墳主体部石棺清掃、空撮に伴う清掃作業。4号墳壁体石取り上げ。墓壙清掃、精査。2号墳埋め戻し。3号墳Dトレ
- ンチ拡張区より結晶片岩が出土。
- 10月12日 1号墳Tトレントレーナーより埴輪基底部が出土。4号墳主体部埋土除去終了。レプリカ作成(京都科学)。
- 10月14日 主体部石棺レプリカ作成現地作業(京都科学)。
- 10月17日 石棺埋土ふるいがけ。トレントレーナー埋め戻し(3号墳各トレントレーナー、1号墳一部トレントレーナー)。石棺埋め戻し準備。
- 10月18日 各トレントレーナー埋め戻し。主体部埋土ふるいがけ。Gトレントレーナー埴輪基底部内完掘作業。
- 10月19日 1号墳主体部断ち切り。後円部北側清掃、精査。
- 10月26日 1号墳主体部埋土埋め戻し。主体部埋土内より白玉及び鉄劍(鉄製品)が数点出土。
- 10月30日 墳丘部埋め戻し。主体部盗掘坑埋土ふるいがけ。
- 11月6日 墓輪基底部取り上げ。
- 11月8日 各トレントレーナー埋め戻し。1号墳埋め戻し。表土整地作業。
- 11月14日 調査区養生。物品撤収。
- 11月15日 引越し作業。



2 調査成果

(1) 遺跡の位置 (I-第1図およびII-第1・6・24図)

調査地点は鳴門市大津町大代の阿讚山脈東端南麓、標高約43mの尾根上に位置する。現況は山林である。徳島県鳴門市の南西部、吉野川河口の北岸、鳴門市大麻町の阿讚山脈南麓の低丘陵には多くの古墳が形成され、近隣には萩原墳墓群・天河別神社古墳群・宝鏡寺古墳などの前期古墳が所在する。

(2) 古墳群の構成 (第2・3図)

調査概要

大代古墳は徳島県と香川県を分断する阿讚山脈の東端南麓、標高約43mを測る尾根上に位置する。2000年3月10日、立木伐採後の調査区域確認のための立会によってその存在が明らかとなった。大代古墳が所在する尾根上には、大代古墳を中心としてその周囲に2基の円墳が築かれており、計3基の古墳群を構成している。また大代古墳から東方向にのびる尾根先端部の斜面では墳丘を伴わない箱式石棺1基を検出している。

平成12年度に、大代古墳を含む古墳群の範囲確定のため、周辺3,840m²についてS=1/200、25cmコンターラインによる平板地形測量を実施した。地形測量により確認された大代古墳北側の円墳を2号墳、南側の円墳を3号墳とする。また地形測量と併行して、東尾根部、大代古墳、2号墳、3号墳および東尾根部で検出された1号箱式石棺の順に試掘調査を行った。大代古墳については現状保存を念頭に置き、必要最小限のトレンチによる確認調査にとどめた。調査の概略については以下の通りである。

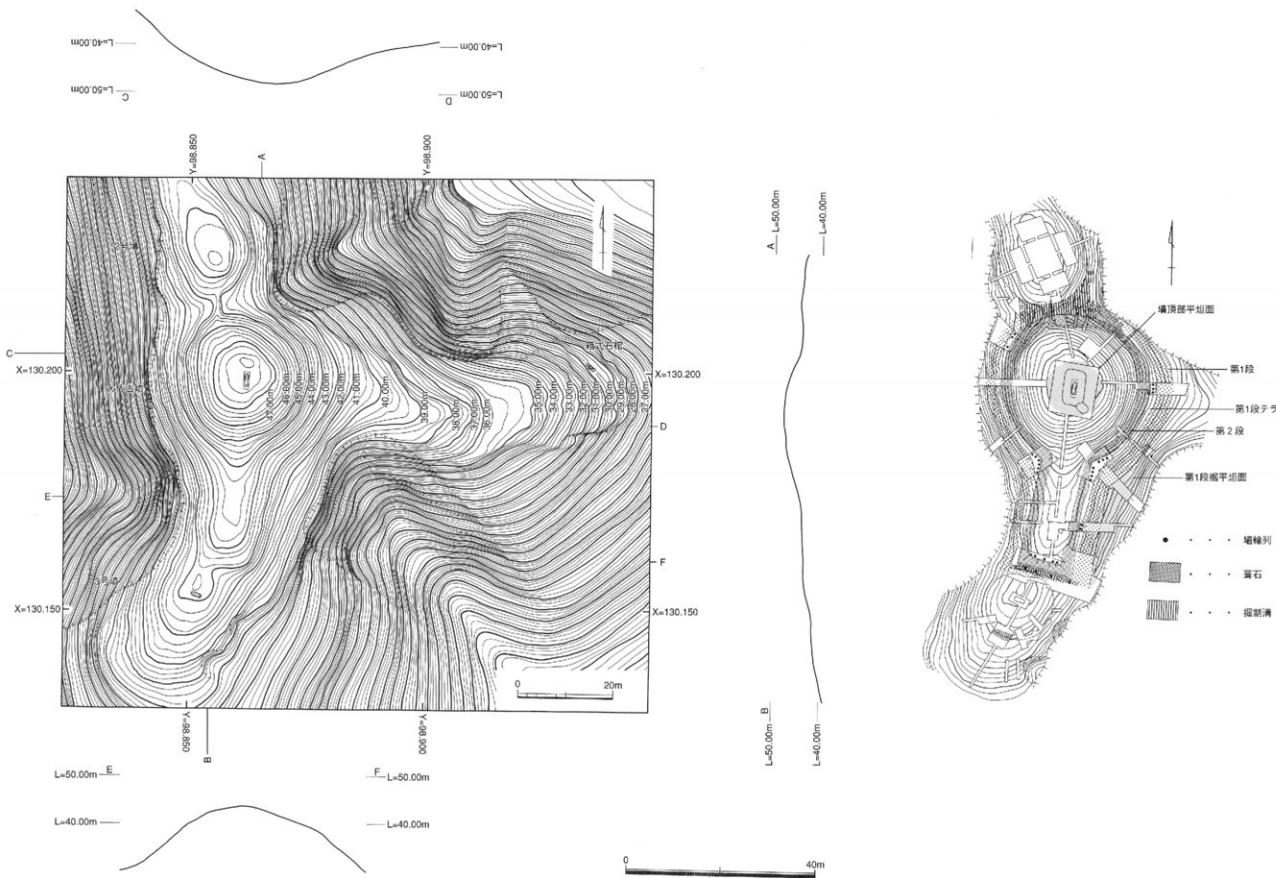
東尾根部では、尾根頂上にA~Fの6ヵ所のトレンチを設定して掘削作業を実施した。A~Fトレンチでは、表土直下は和泉層群起源の砂岩・泥岩の礫群の岩盤となっており、上からの流れ込みと思われる埋滅した埴輪小片が少量出土したが、遺構は確認されなかった。

大代古墳については、主体部と墳丘部の両方の調査を実施した。墳丘部はG~Zの20ヵ所のトレンチを設定し、墳丘構造の把握に必要な最小限度の調査を実施した。また石棺については、レプリカの製作を実施し、当センターに展示・活用されている。

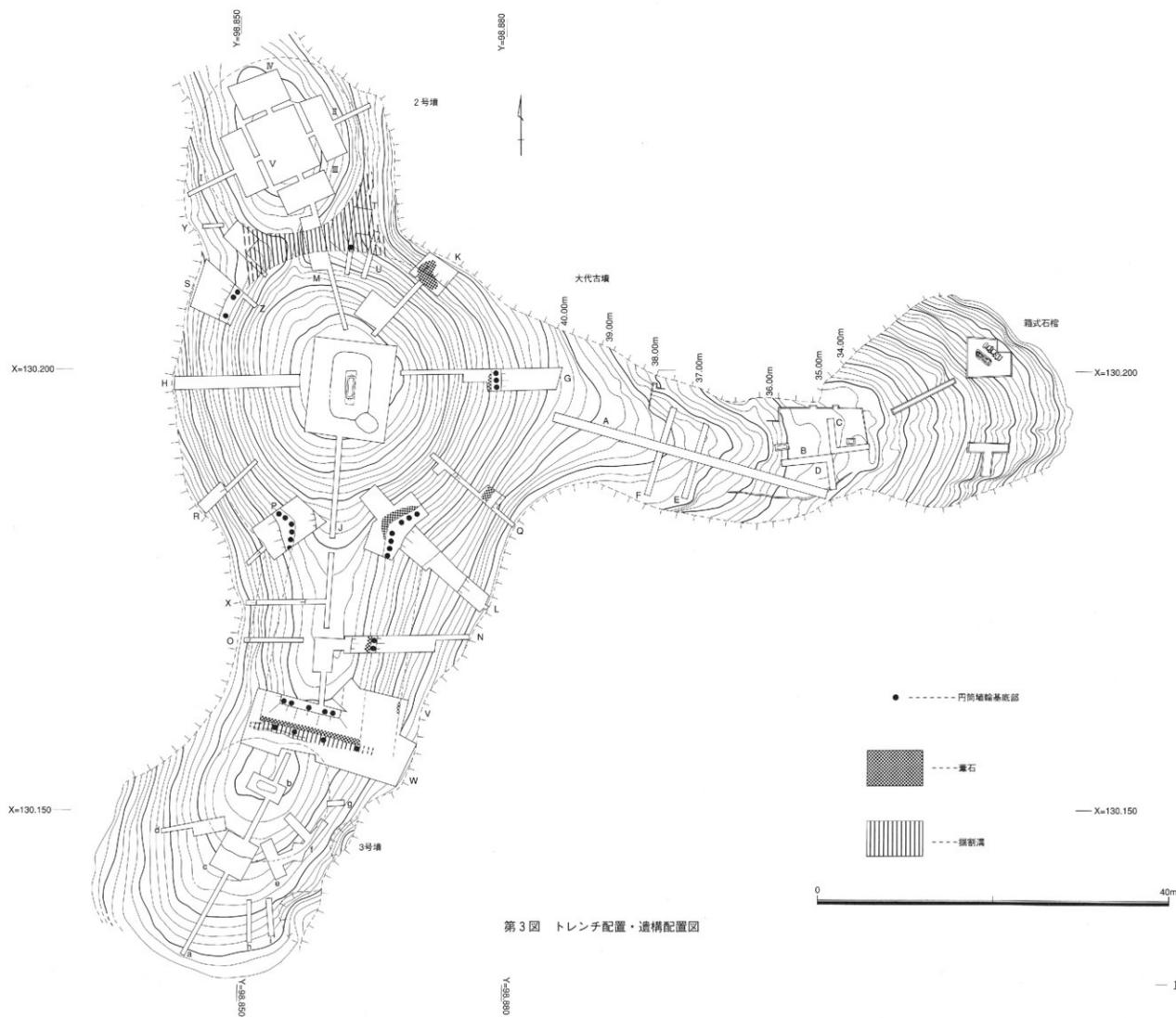
2号墳は東西中心軸にI・IIトレンチを設定し、掘削作業を実施した。また墳頂部には放射状に5ヵ所の調査区を設定し、調査を行った。2号墳は直径約22m程度の円墳で、地山削出しにより墳丘を整形する。葺石、埴輪等の外表施設は確認していない。また主体部も未確認である。

3号墳はa~iの9ヵ所のトレンチを設定し、必要最小限度の調査を実施した。3号墳は直径約15mの円墳である。墳丘斜面において葺石を、墳頂部において円筒埴輪基底部1基を検出した。主体部として箱式石棺1基を検出したが、構築位置が墳丘の中心軸からやや北にずれることから、さらに別の埋葬主体が存在する可能性も考えられる。

調査途中に東尾根部東端斜面において箱式石棺が検出され、1号箱式石棺として本調査を実施した。なお本墳の調査概要については速報として一部報告を行っている（菅原・幸泉 2000）。



第2図 大代古墳周辺地形平面・大代古墳埴丘断面図および大代古墳埴丘各段企画模式図



(3) 大代古墳（1号墳）

各トレンチの所見

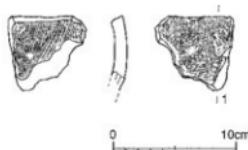
調査に先立ち、現況地形測量を実施し、墳丘位置を確認した後、現地保存を念頭に置き、古墳の規模形状・墳丘構造の把握に必要な最小限度のトレンチ調査を実施した。また必要に応じてトレンチの拡張も行った。各トレンチは墳丘・調査区斜面に平行もしくは直交するように設定した。

A トレンチ（第4図）

東尾根部の尾根筋に沿って斜面に直交するように、東西方向に設定したトレンチである。基本層序は表土・腐葉土・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤である。出土遺物はほとんど無く、若干の埴輪小片が出土したのみである。

出土遺物（第5図）

円筒埴輪片が出土したが、小片のため詳細は不明である。
1は円筒埴輪の口縁部片である。器面調整は、外面タテハケ、
内面は斜め方向のハケを施す。



第5図 A トレンチ出土埴輪

B・C トレンチ（第6図）

東尾根部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤である。遺構・遺物の出土はみられない。

出土遺物

出土遺物はなかった。

D～F トレンチ（第6図）

東尾根部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤である。出土遺物は若干の土師器細片が出土したのみである。

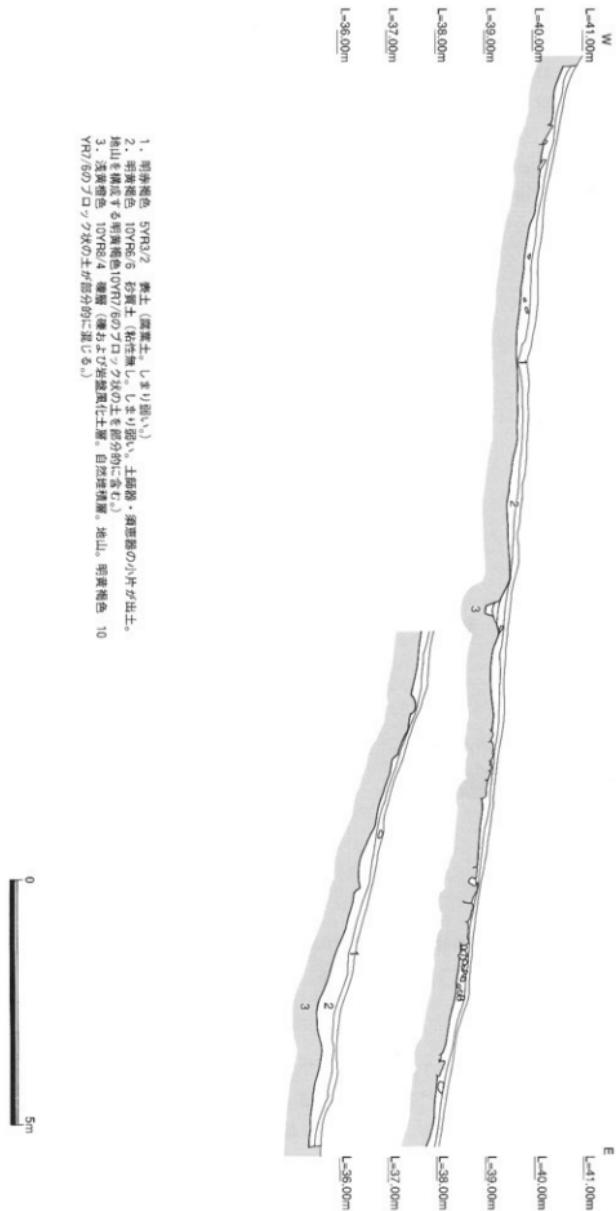
出土遺物

出土遺物は細片のため、実測可能なものはなかった。

G トレンチ（第7・8図）

後円部東側斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認し、また墳丘裾、および第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。葺石は流出のためか、遺存状況は良くない。葺石はその出土状況から墳丘斜面全体ではなく、裾部を列石状に区画する構造をとるものと思われる。



第4図 A トレンチ土層断面図

第1段テラス上において、円筒埴輪列の基底部を確認した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。

このほか墳丘調査区の流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

出土遺物（第9・10図）

出土した円筒埴輪片はいずれも小片である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干擒み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

2~15は形象埴輪で、家形（2・6・7・8・9・10・11・12・13・14）、蓋形（3・15）、盾形（4・5）がある。

家形のうち、2・11・12は縦横の線刻による網代文様をもつ屋根部分である。9は軒先に水平方向の格子によって押縁を表現したものである。上半は摩滅していて表面が残っていない。7・8・10・11・13・14は表裏ともに表面調整が粗く、内部構造または基部にあたる。10・14は角材状の部材を表したもの、13は壁体で下辺に突帯の剥離痕跡がある。なお家形埴輪についての用語は、宮本氏の表現に準じた（宮本 1996）。

蓋形のうち、3は表裏の同位置に平行な線刻をもつもので、立筋とみられる。15は円筒形の軸部に幅広な重帯を貼り付け、2条の平行な線刻を重ねる。軸部にも斜位の線刻がある。

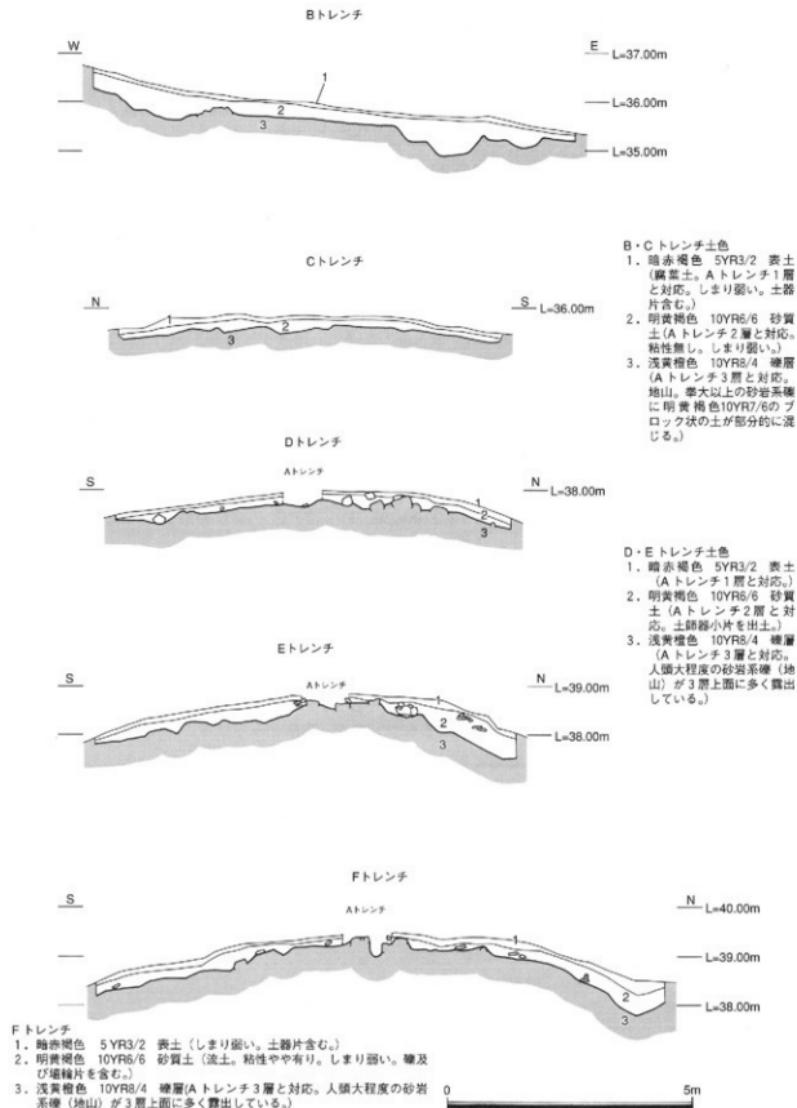
盾形はいずれも小片で、うち4は盾面の外向鋸歯文の一部と思われる。

Hトレンチ（第11図）

後円部西側斜面、Gトレンチの対面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認したが、遺存状況はあまり良くない。流出のためか葺石・円筒埴輪列基底部は検出されなかった。

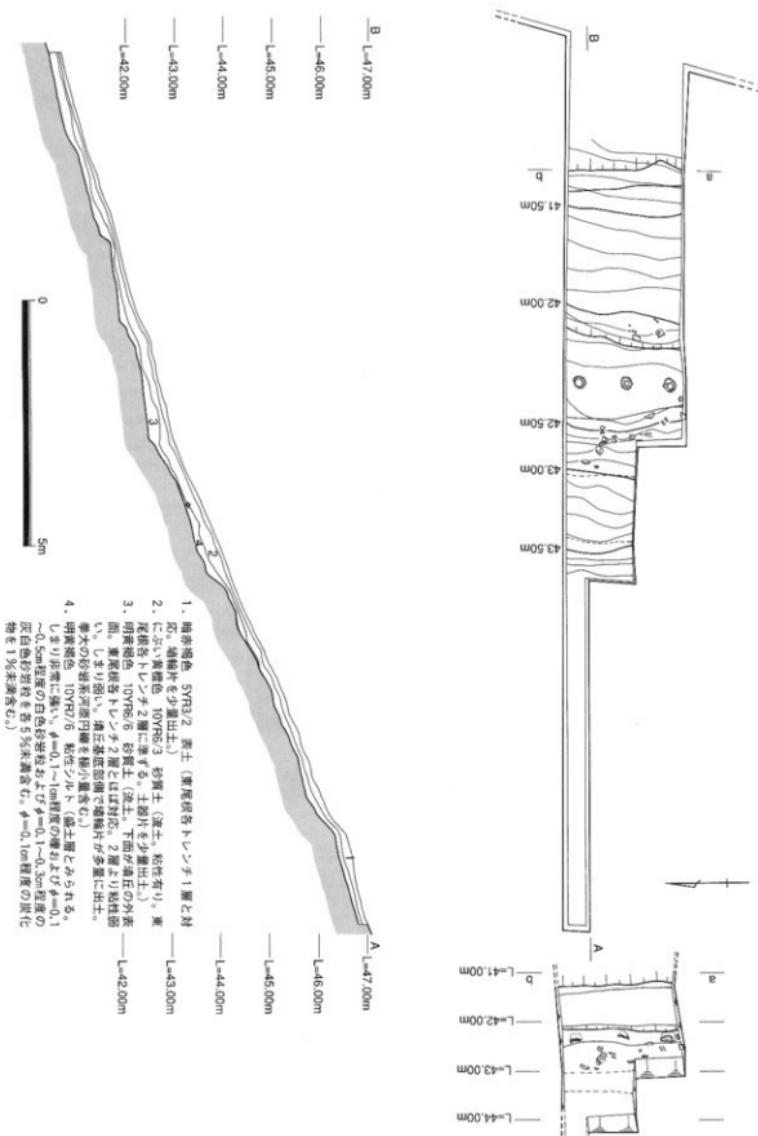
出土遺物（第12図）

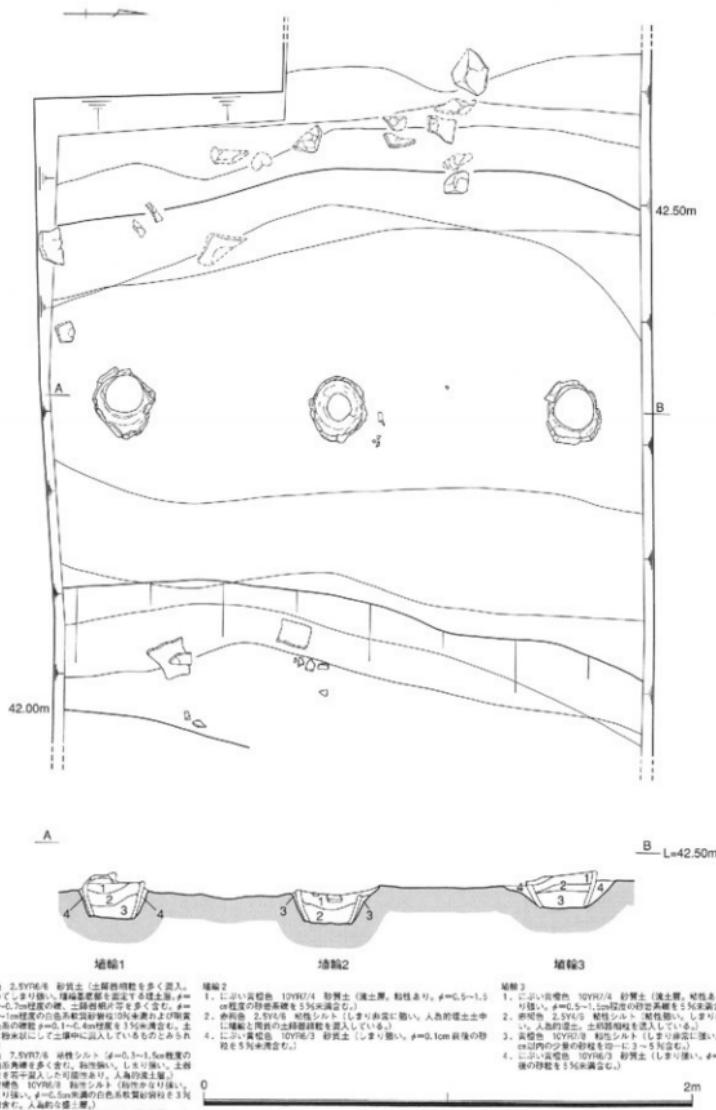
出土した埴輪片には円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。いずれも小片であるため、詳細は不明である。胴部には断面台形状を呈するタガがめぐるが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテ



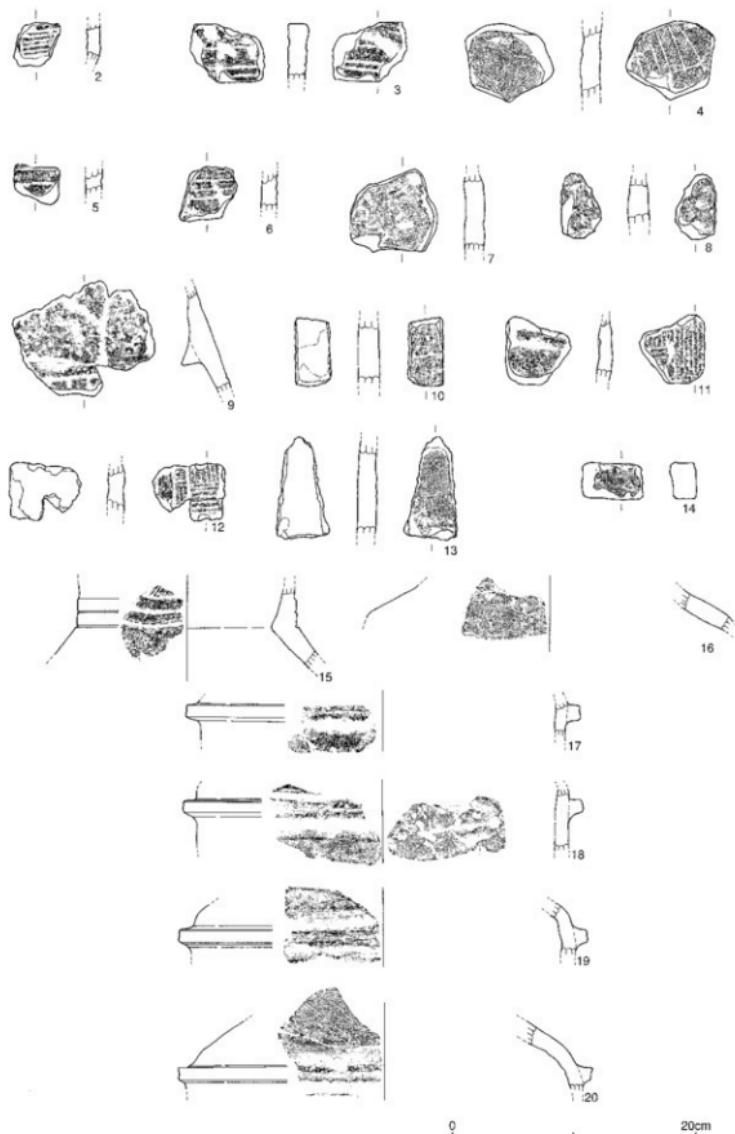
第6図 B～F トレンチ土層断面図

第7回 おじいちゃん・姫・立面図

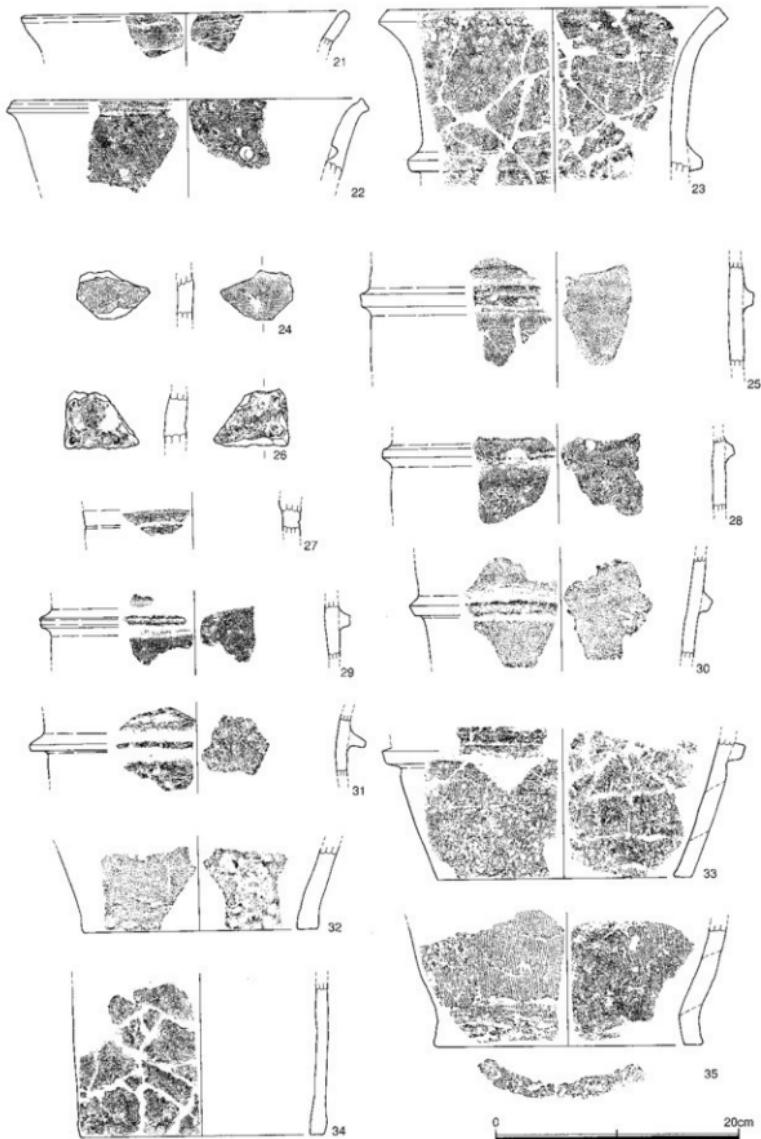




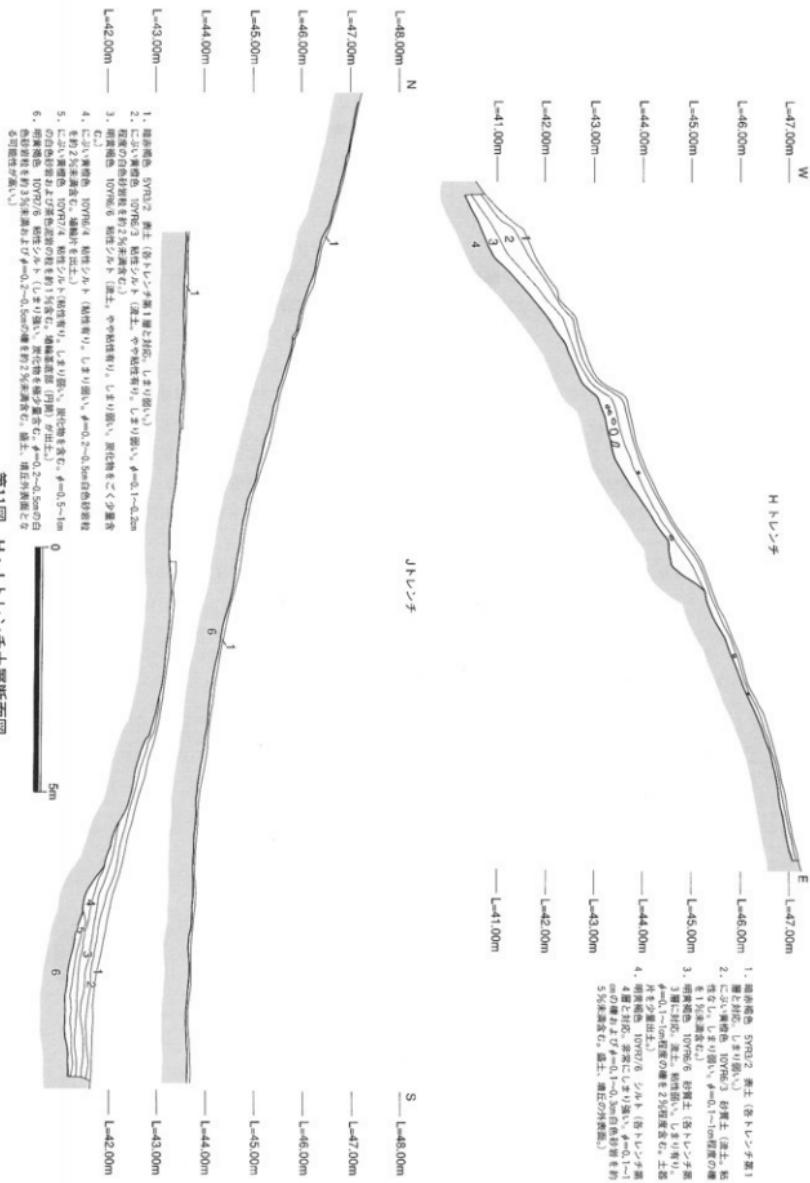
第8図 Gトレンチ円筒埴輪基底部平・断面図



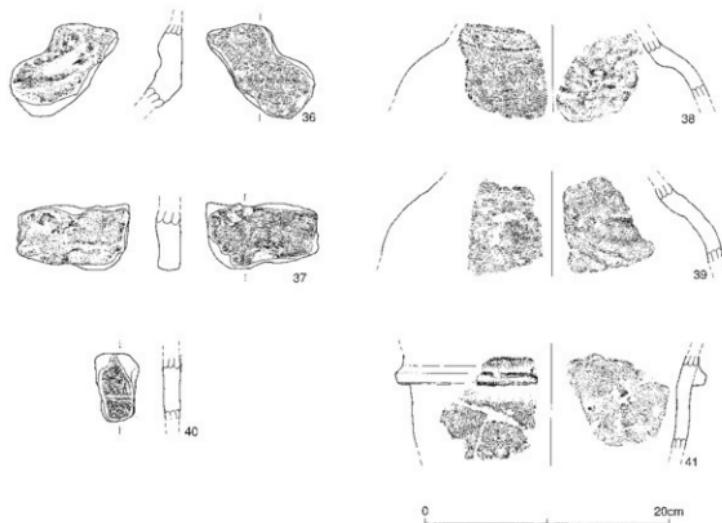
第9図 Gトレーニチ出土埴輪1



第10図 Gトレンチ出土埴輪2



第11図 H・J・トレンチ土層断面図



第12図 H トレンチ出土埴輪

ハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

埴丘土内から出土した家形埴輪、盾形埴輪の破片、報形埴輪の一端である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

形象埴輪には、家形（36・37）があり、家形または蓋形とみられる（40）がある。

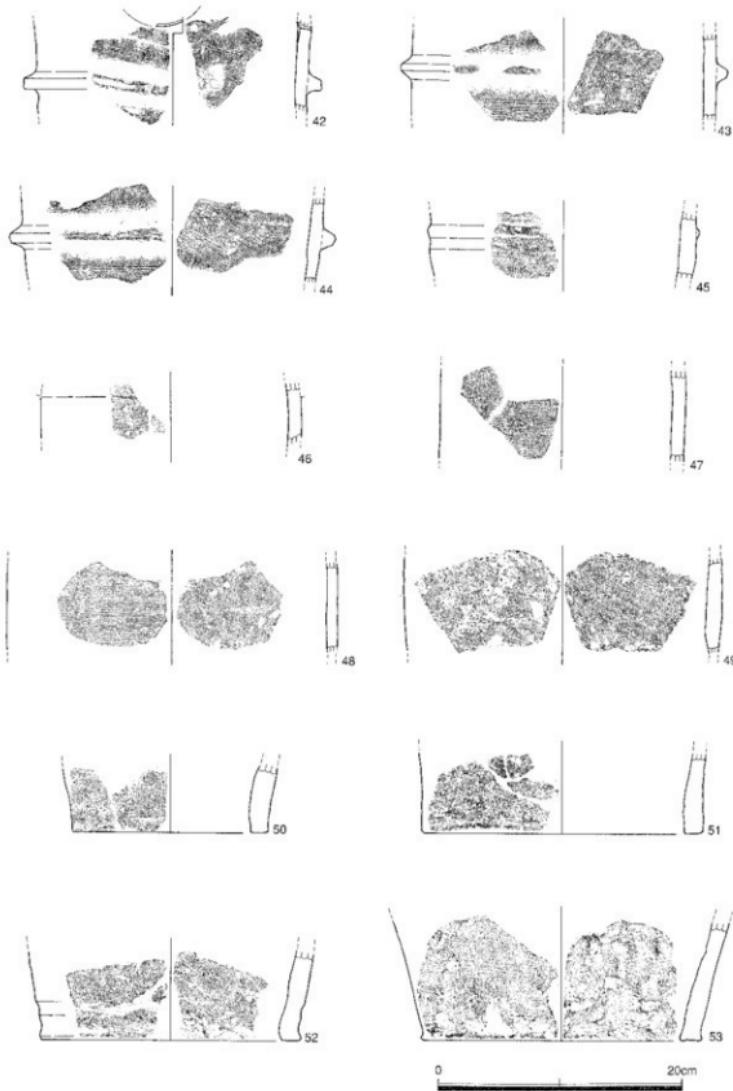
家形のうち、36は断面「へ」字形となる鼠返形突帯で、上面は平滑に整形されている。37は基部である。

J トレンチ（第11図）

後円部南側斜面から前方部前面掘割溝にかけて南北方向に設定したトレンチである。基本層序は表十（腐葉土）・埴丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉崩群岩盤となるが、2層以下は掘削溝内堆積土である。掘削溝内土からは円筒埴輪片等が出土している。

出土遺物（第13図）

埴輪片が出土している。主に掘削溝内からの出土であり原位置は遊離している。いずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、胴部に断面台形状を呈するタガがめぐるが、その条数については不明である。器面調整は、1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。



第13図 Jトレンチ出土埴輪

K トレンチ（第14回）

後円部北東側、斜面に直交して設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流水土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第1段テラス、第2段外周裾を確認したが、流出のためか、円筒埴輪列は検出されなかった。また第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。出土状況から葺石は墳丘斜面全体ではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べる。その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせる。

出土遺物（第15～24図）

墳丘流水内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

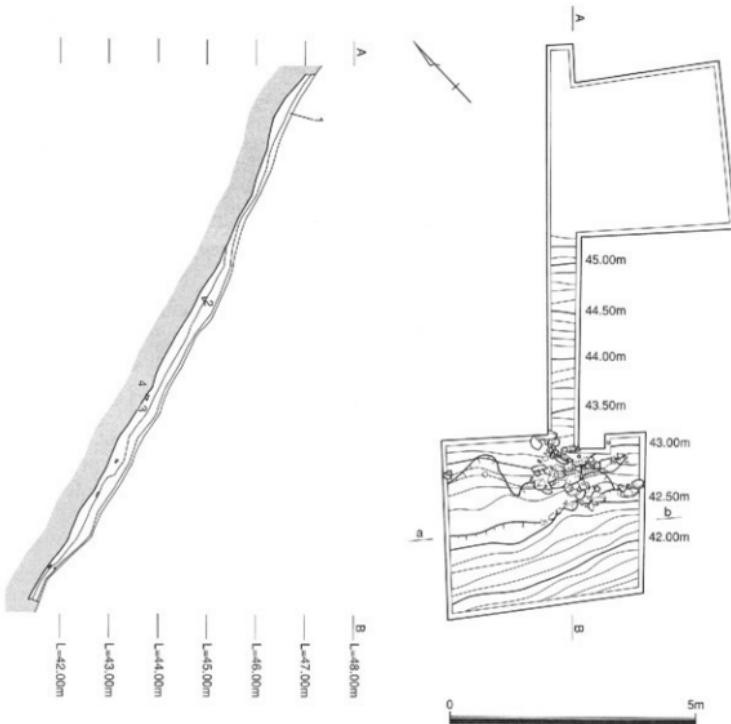
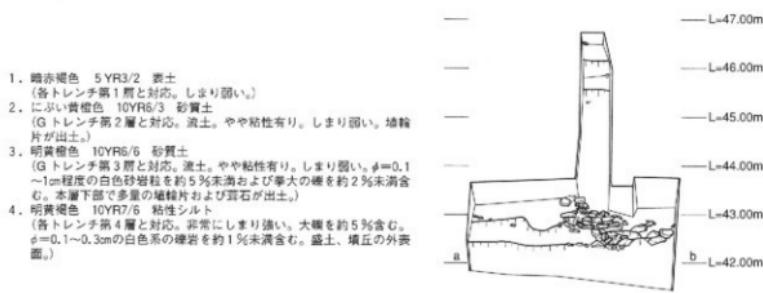
墳丘流水内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

54～145は形象埴輪で、家形・鞍形・蓋形があり、盾形とみられるものもある。54～56は、線刻による網代文様を表現した寄せ棟造りの屋根部分の上半部分である。棟覆は線刻を付した扁平幅広な突帯を縱・横に貼り付けることで表現している。網代は縱横の区画を広く割り付けてから、小さい単位に分割しているため、部分的に当初の割付線が残る。妻側の縁辺と中央にも同様に棟覆の突帯と網代文様が表される。このバーフと同様に網代文様がある破片には72・80・144がある。

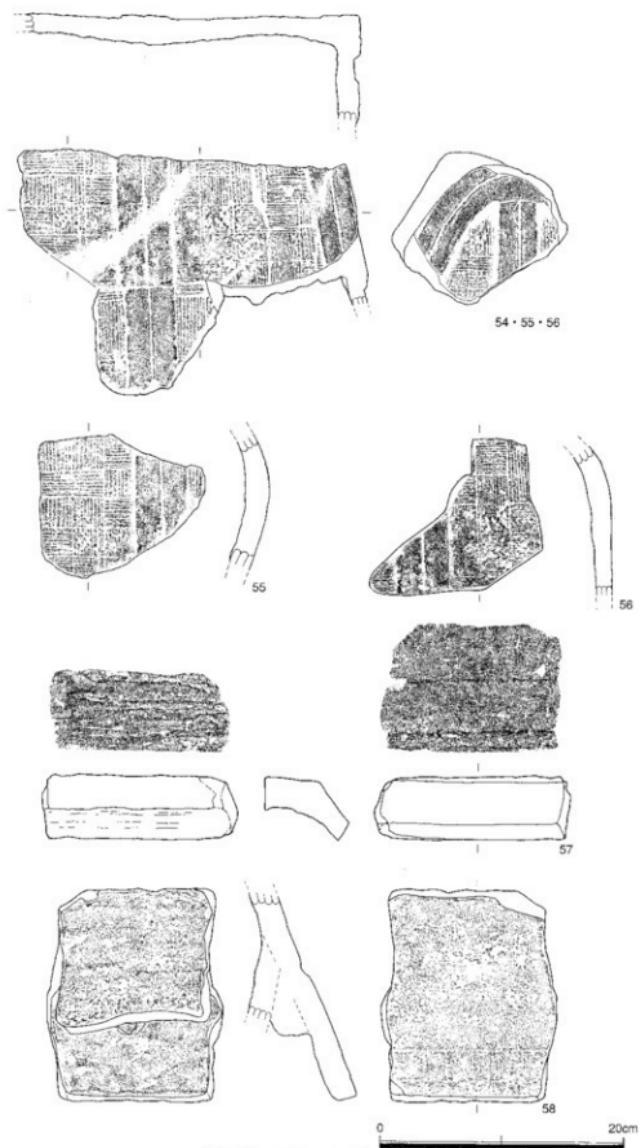
71・88は網代文様をもたない寄せ棟造りの屋根の上半部分である。上述のものと比較して全体に小形である。妻・屋根双方ともに54～56と同様のパターンの棟覆をもつが、突帯ではなく線刻による表現を施す。

屋根の軒部分には、器壁が厚手で軒が深く押縁の格子が大きく述べられたもの（58・86）と、やや薄目の器壁で軒が浅く押縁の格子が小振りなもの（59・65・74・79・103）とがある。58は軒の重量を支えるための補強の粘土塊が軒下に用いられている。屋根の面が完全に剥落している140にも同様の補強がある。66・96も屋根との接合付近の破片である。軸部と屋根の接合はいずれも軸部の上端面全体で屋根を受ける技法である（青柳 1995）。

壁部分としては、69・70・77・85・92・98・104・122・141・142がある。いずれも板状の破片で、縱方向のハケの施される個体とハケをもたない個体とがある。69・70・92にはコーナーが表されている。70には線刻により扉を表現している。69の線刻状に入った圧痕は、成形時のものである。



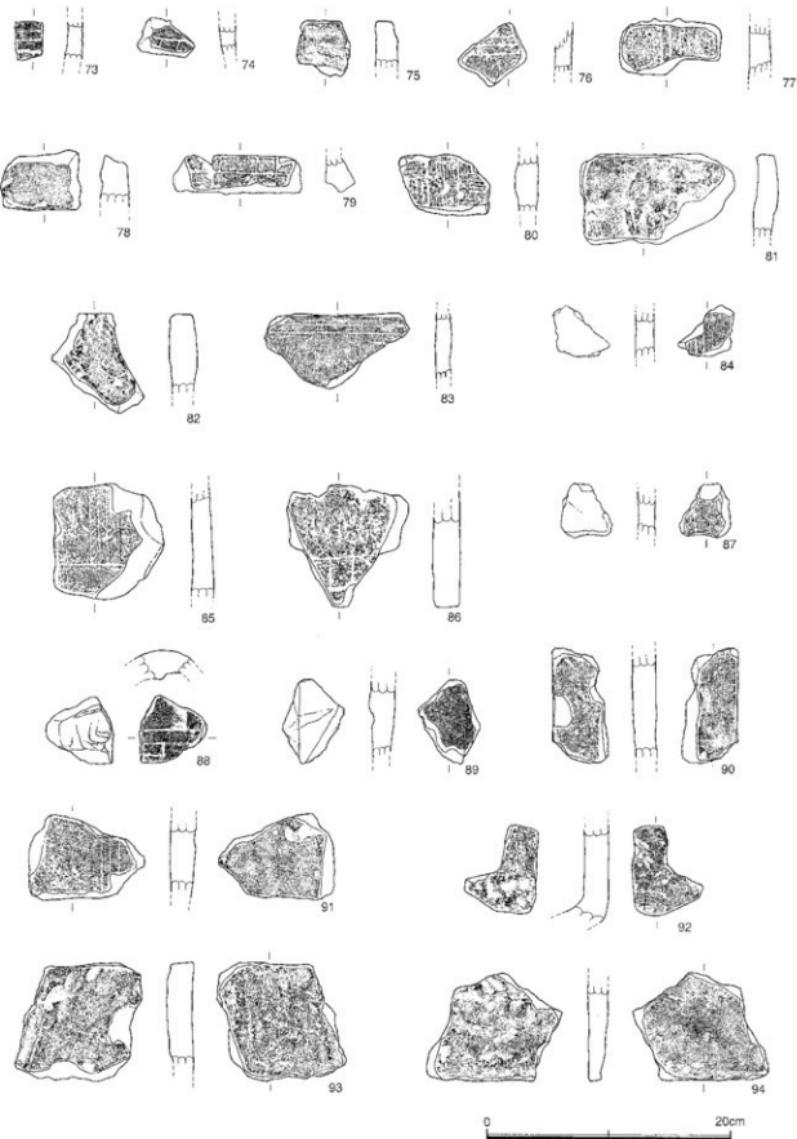
第14図 K トレンチ平・断・立面図



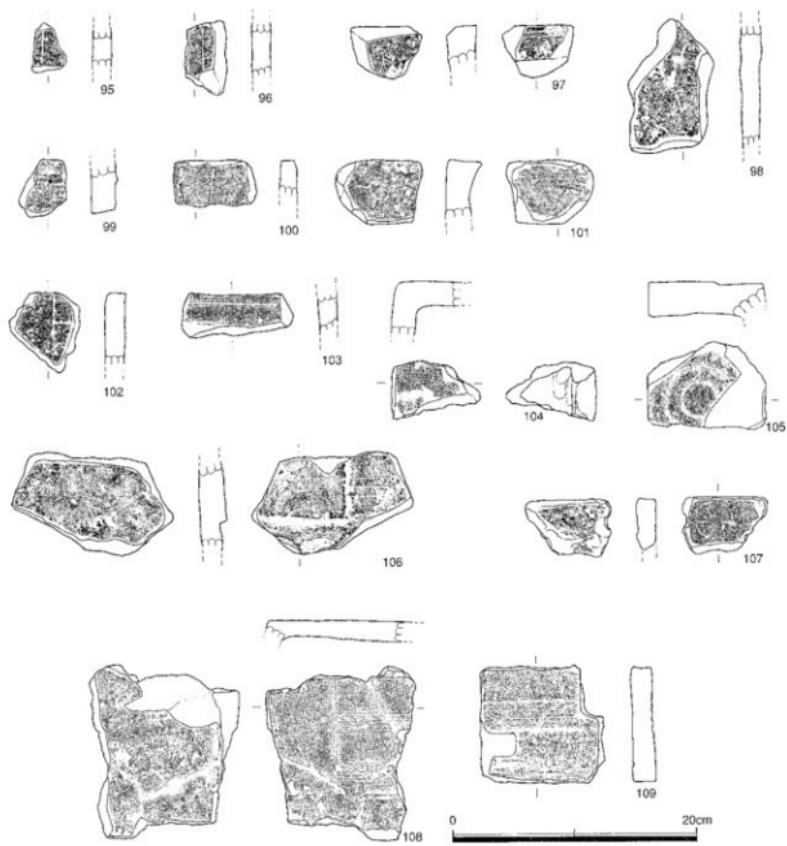
第15図 K トレンチ出土埴輪 1



第16図 Kトレーンチ出土埴輪2



第17図 K トレンチ出土埴輪 3



第18図 Kトレンチ出土埴輪4

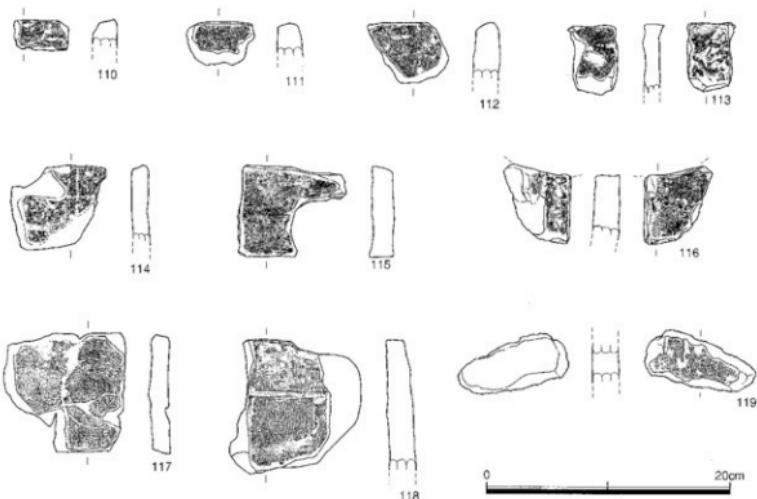
鼠返形突帯には、57・60・61・62・63・64・67・78・89・90・100・127がある。いずれも外面側の調整は丁寧で、非常に平滑である。やや厚手で張り出しの長い57・60・64・67・78・89・90・127と、やや小振りの61・62・63・100の二種があり、2個体以上に付属することが想定される。

75・82・93・101・128・129・133は家形の基部とみられるものである。調整は内外面ともに粗い。

駒形は68・81・105~109・117・118・123が該当し、97・98・104もその可能性がある。81・108・109は箱形の矢筒部である。いずれも厚手の板状のもので、108・109には横帯が線刻による綾杉文で表現されている。105・106・107・117・123は飾板部分で、いずれも二重円がやや細めの工具で線刻される。

138は蓋形の円筒形の軸部とみられるものである。

73・87・95・102・110~116・119などは小片で器種を決め難い。家形・蓋形・盾形・駒形の可能性が



第19図 Kトレーニング出土埴輪5

ある。145には外面からの穿孔がある。

Lトレーニング (第25図)

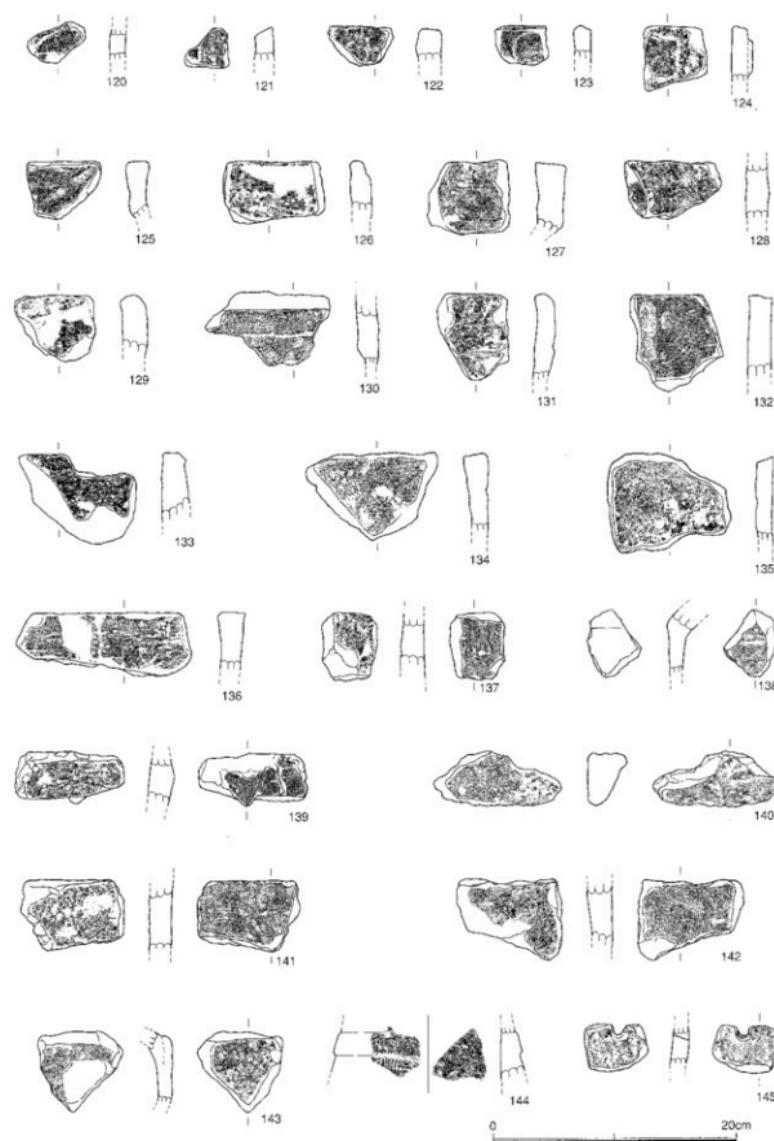
東側括れ部に設定したトレーニングである。基本層序は表土(腐葉土)・墳丘盛土(流土)・岩盤風化土(地山)・和泉層群岩盤となる。トレーニングの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。括れ部の張り出しあはない。

第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認した。第1段テラス上においては円筒埴輪列の基底部を検出した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。また墳丘裾および第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。出土状況から葺石は墳丘斜面全体ではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする削石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べ、その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせるものと考えられる。

出土遺物 (第26~35図)

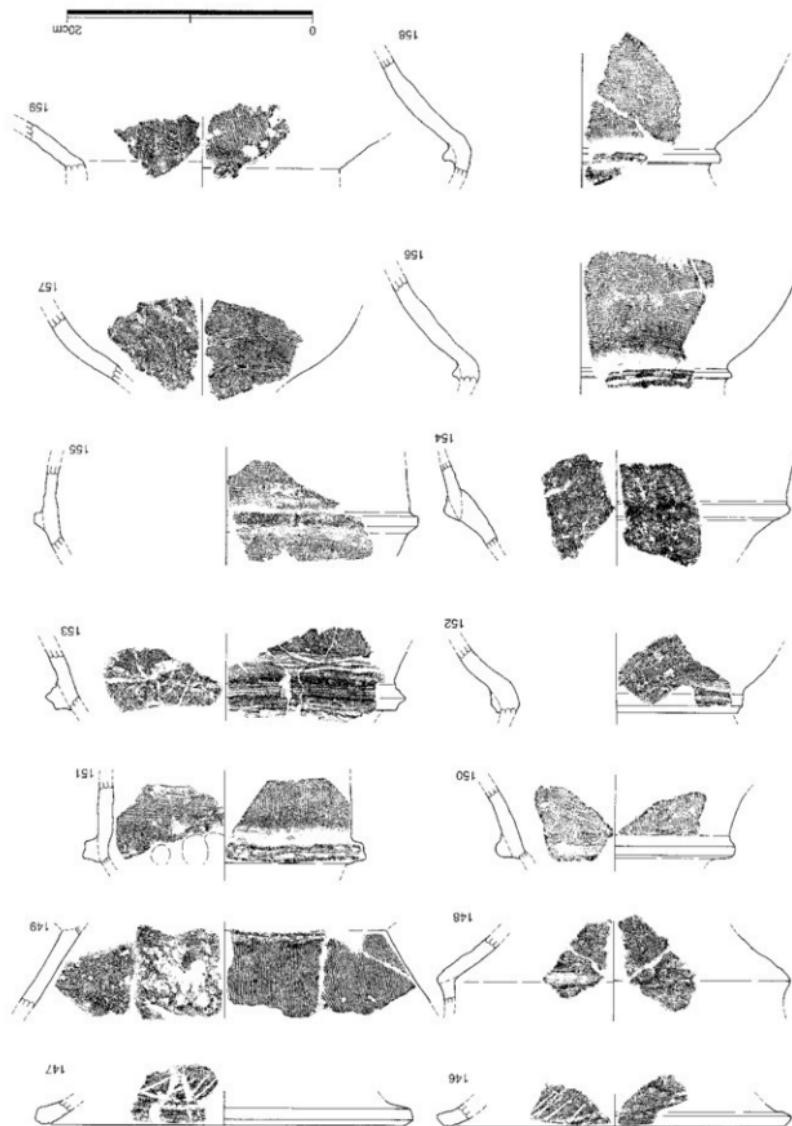
埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。

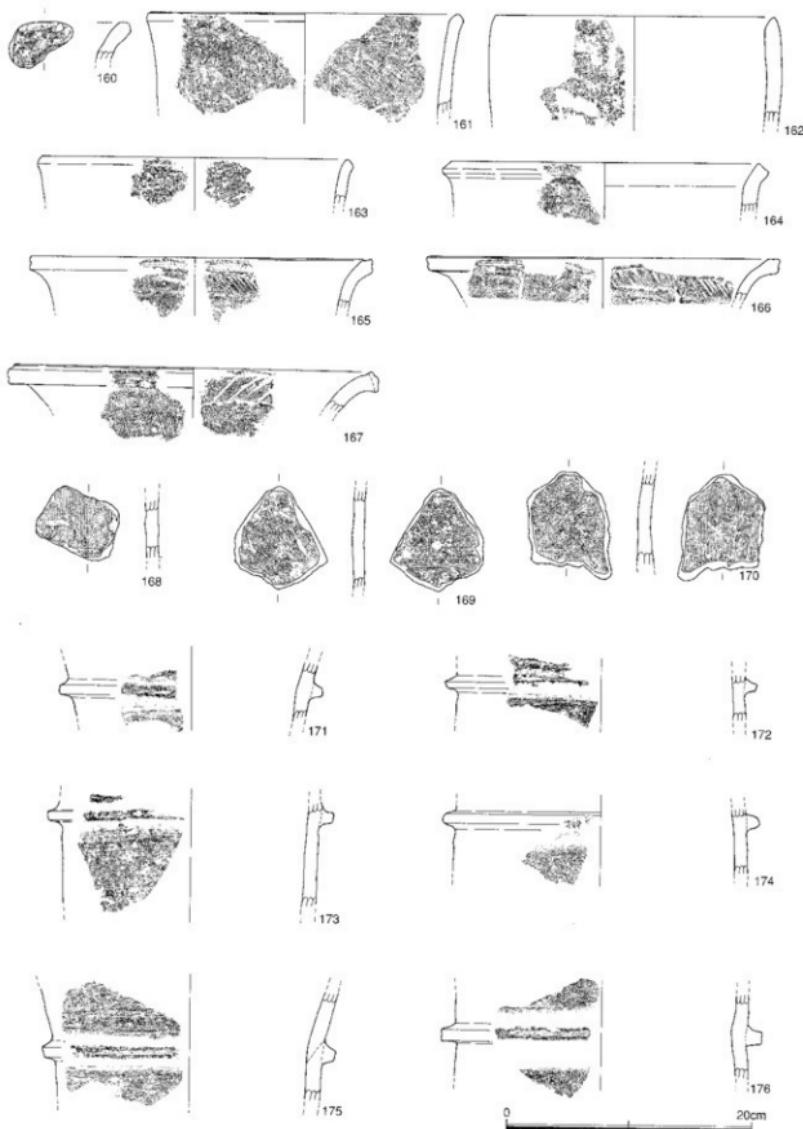
口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。透かし孔は円孔に復元されるもの



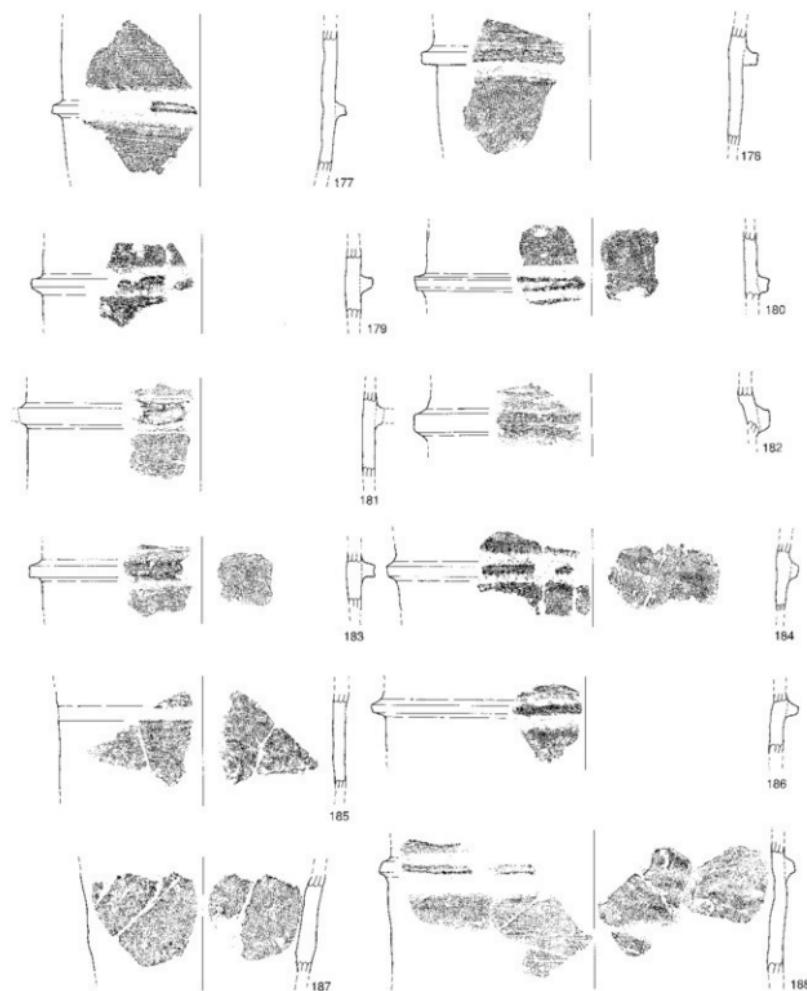
第20図 K トレンチ出土埴輪 6

第21圖 K12/2号出土埴輪7



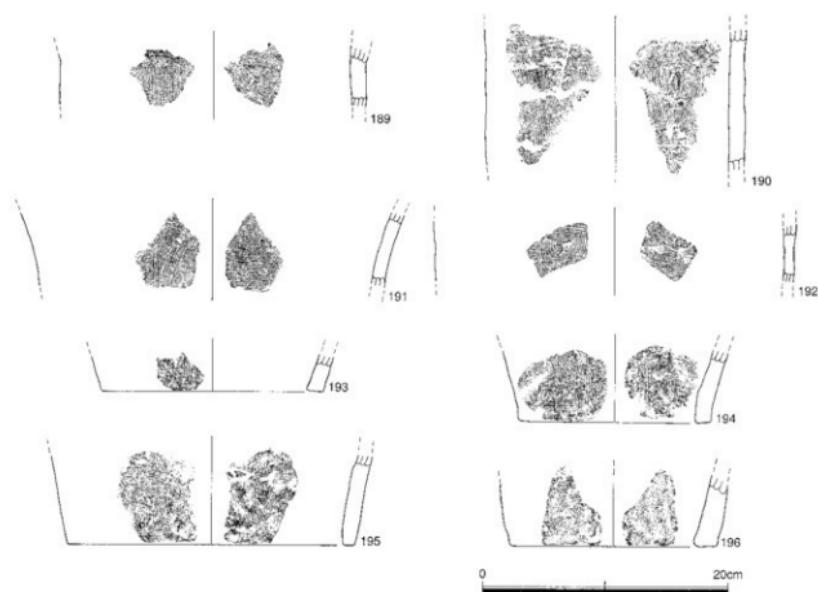


第22図 K トレンチ出土埴輪 8



0 20cm

第23図 K トレンチ出土埴輪 9



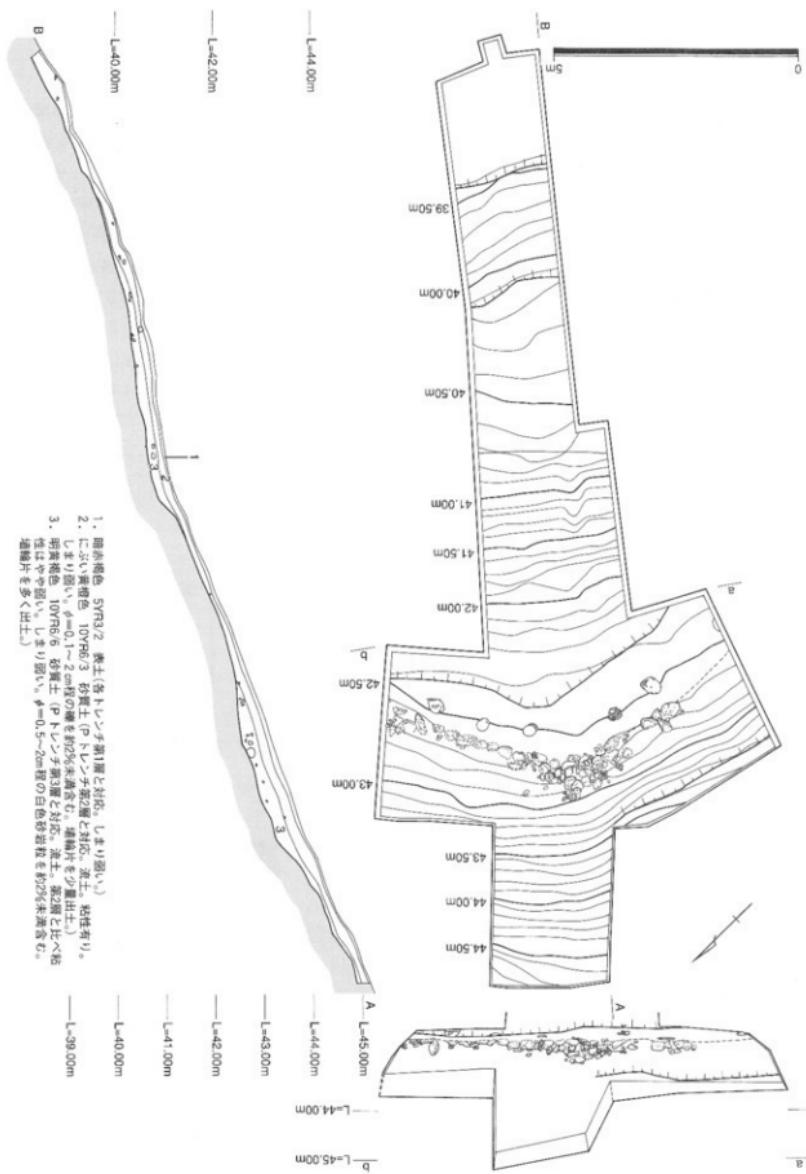
第24図 Kトレンチ出土埴輪10

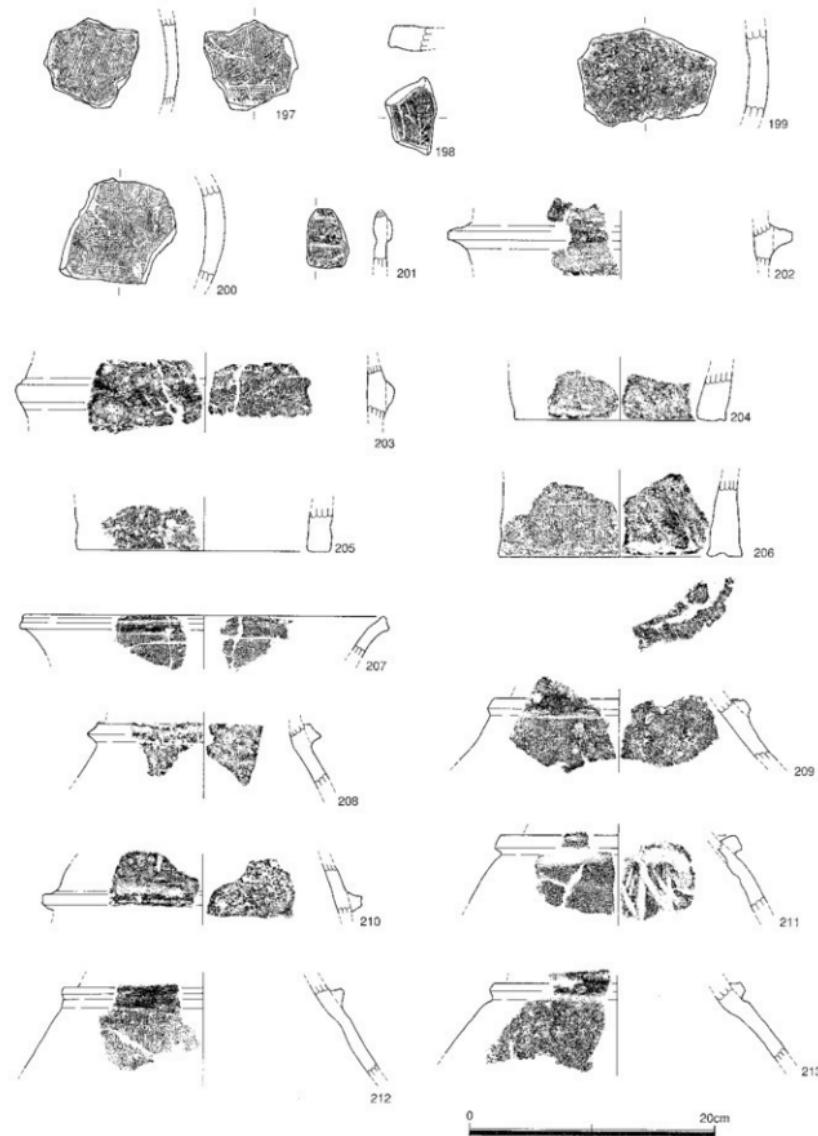
数点を確認している。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のII期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

このほか墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪片の出土は後円部墳丘斜面と後円部墳頂主体部の盗掘坑埋土中に限定されており、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

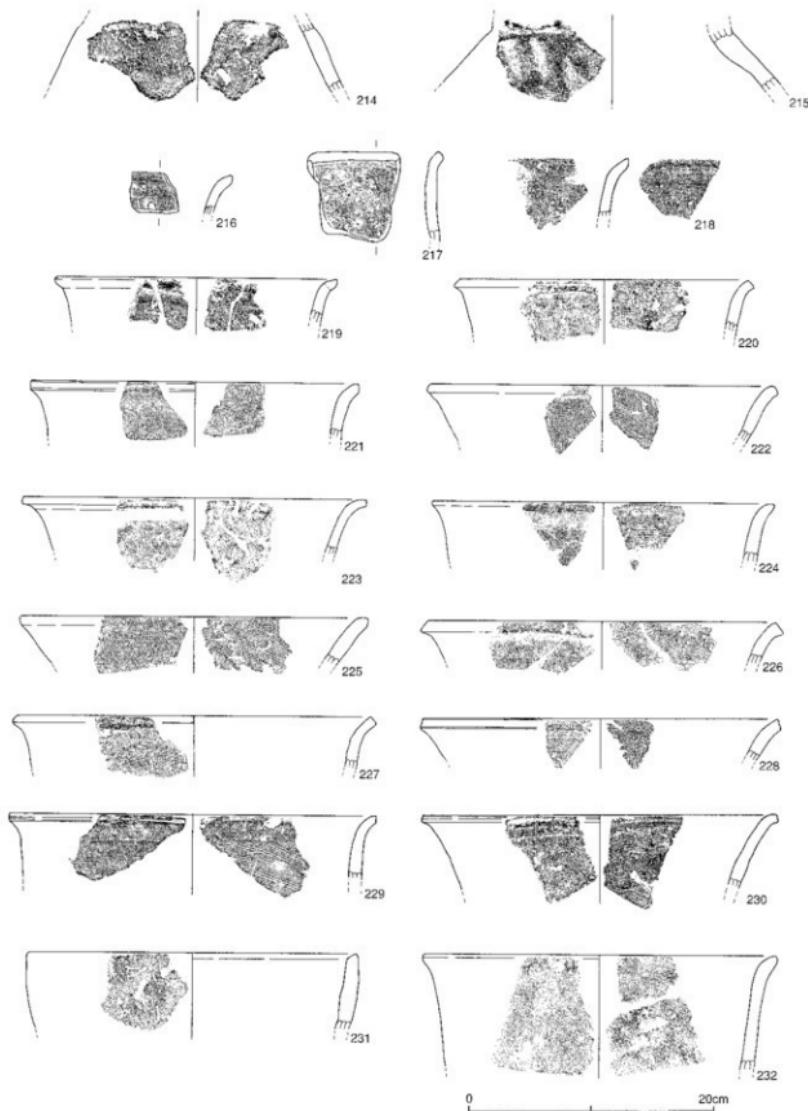
197は線刻による絵画のあるもので、部位は、破片形状・器面調整からみて円筒埴輪の外面口縁部直下にあたるとみられる。区画内を網代状の縱横交互の平行線で充填したモチーフと、舟の舳先あるいは人物の手のように見えるモチーフから構成されるが、詳細は不明である。198は蓋形の立筋の一部あるいは鞍形の鋸板の鋸部分のいすれかと考えられる。

第25図 Lハバチ平・断・立面図(拡大部)



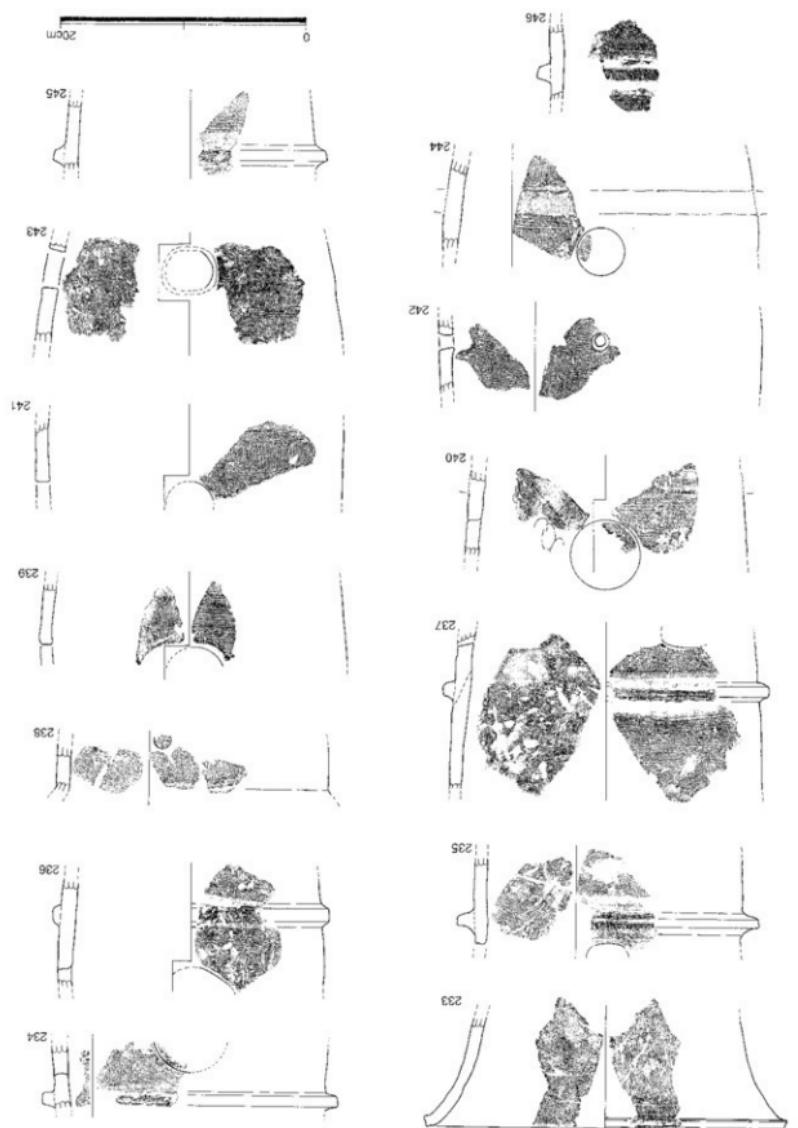


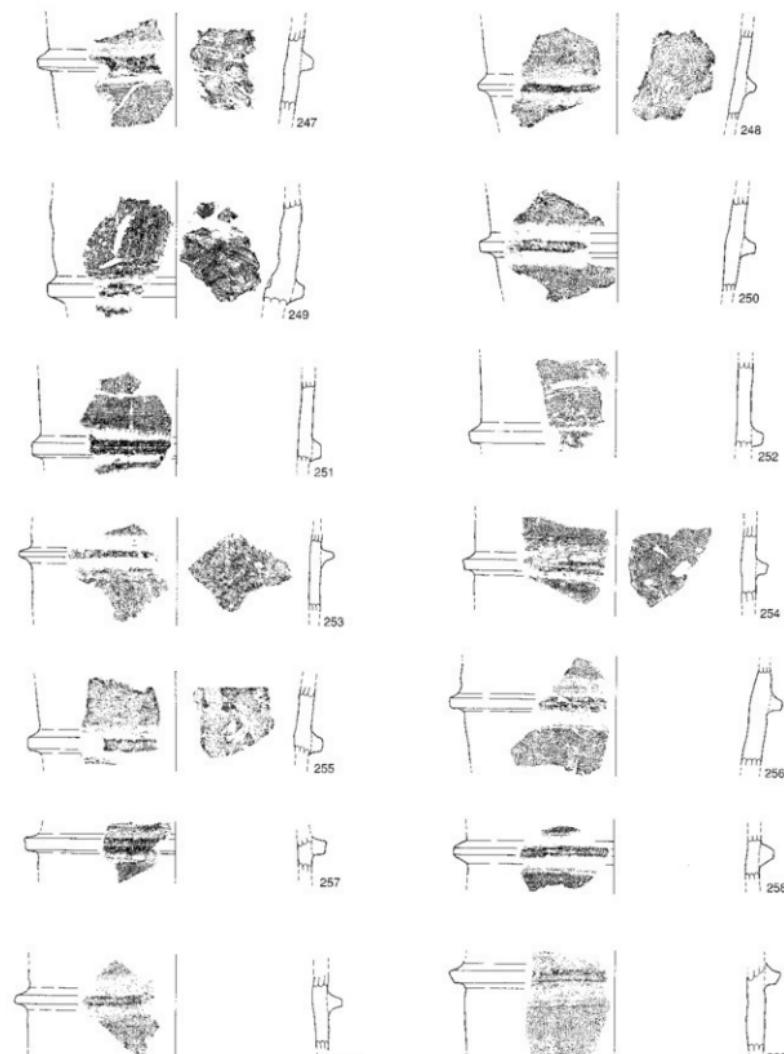
第26図 Lトレンチ出土埴輪1



第27図 L トレンチ出土埴輪 2

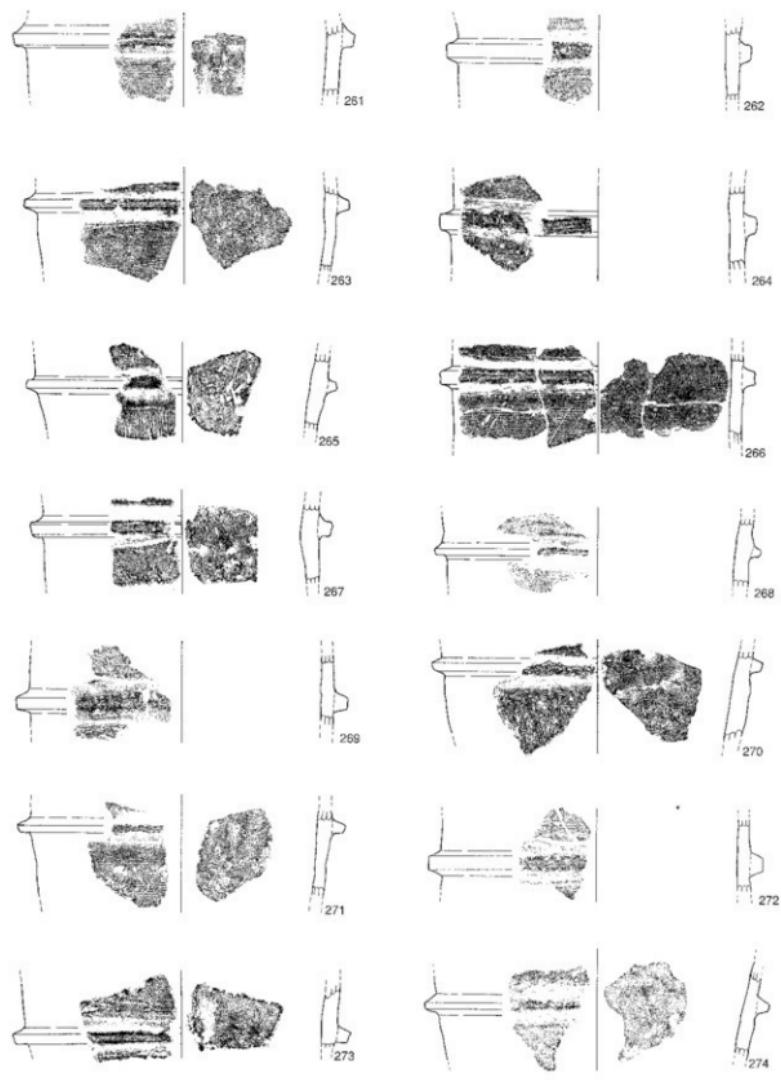
第28圖 L H1:2 手出土埴輪 3





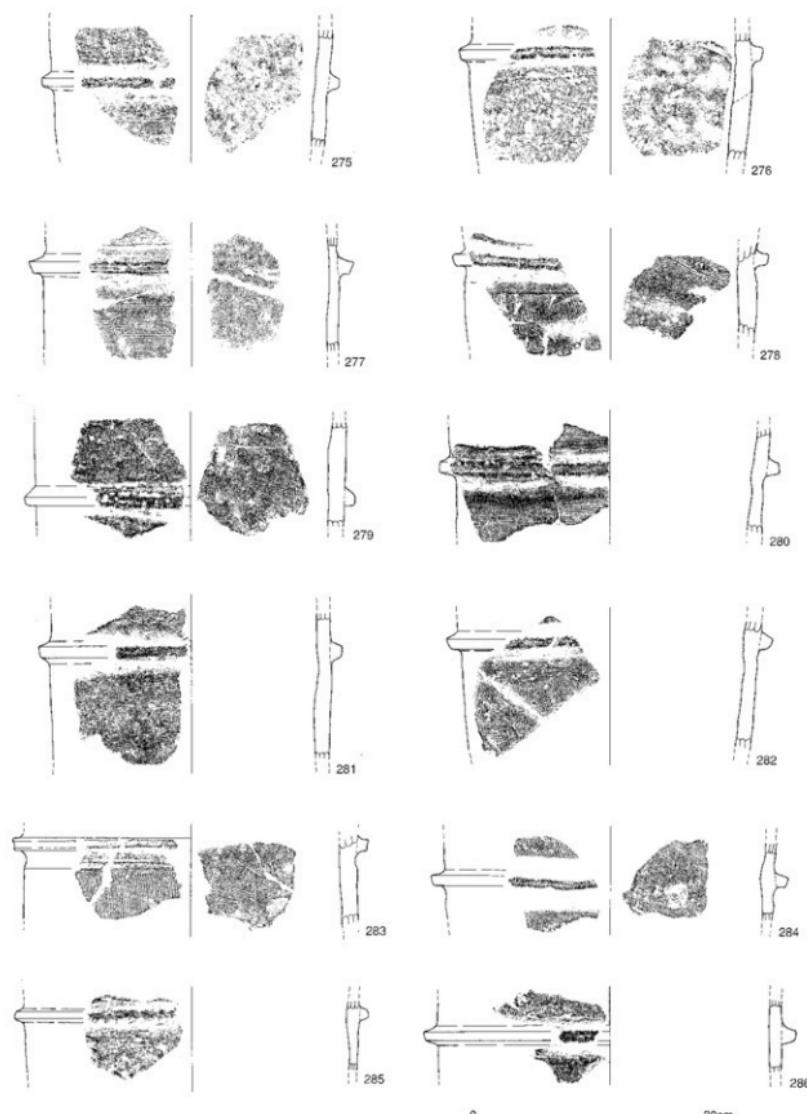
0 20cm

第29図 Lトレンチ出土埴輪4

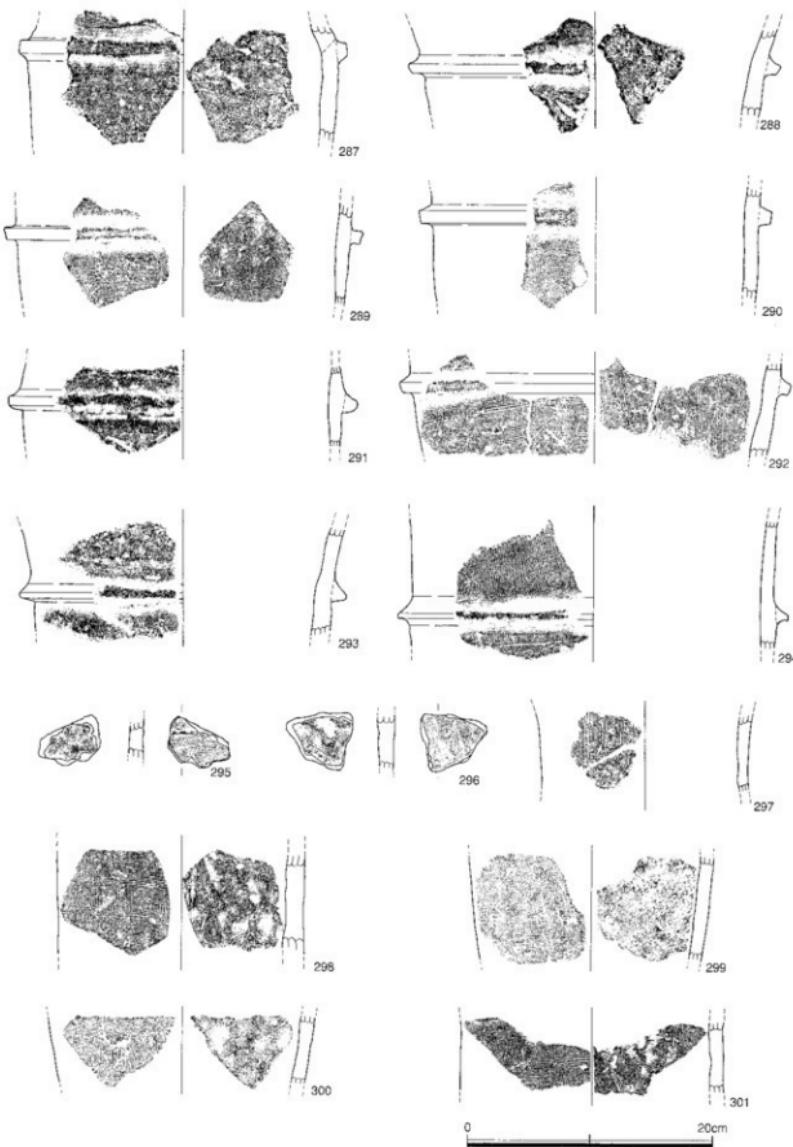


第30図 L トレンチ出土埴輪 5

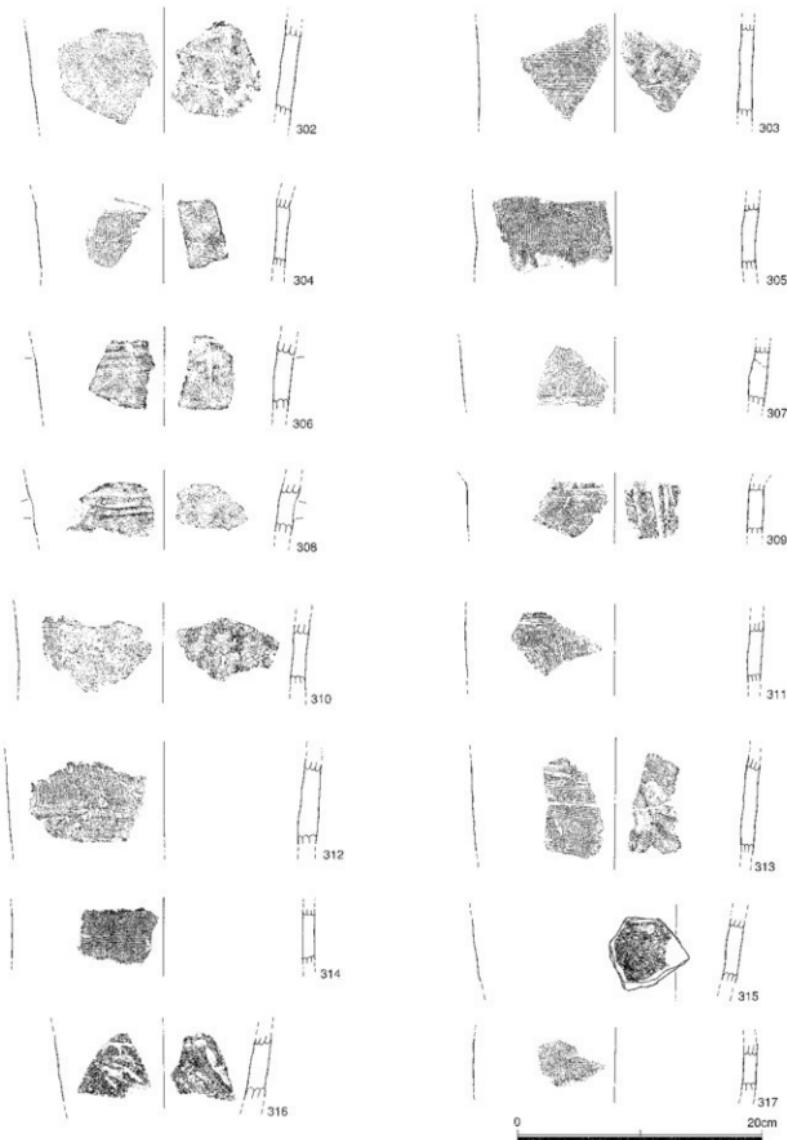
0 1 20cm



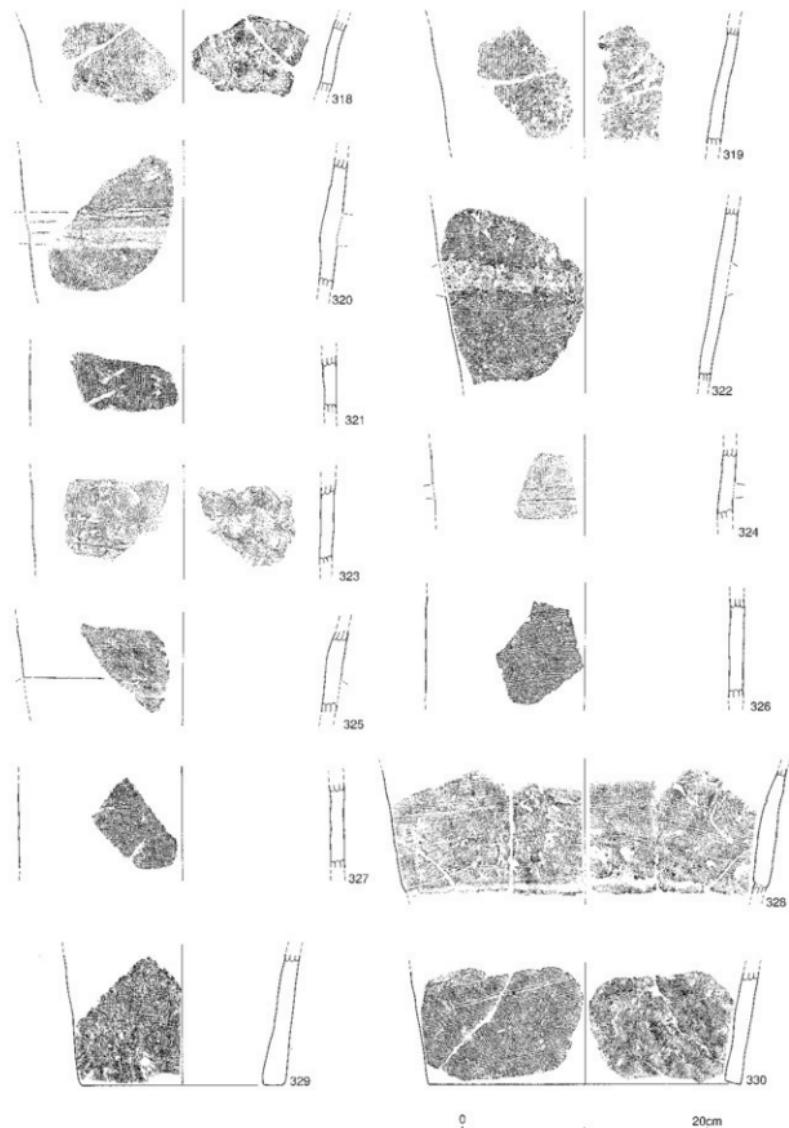
第31図 L トレンチ出土埴輪 6



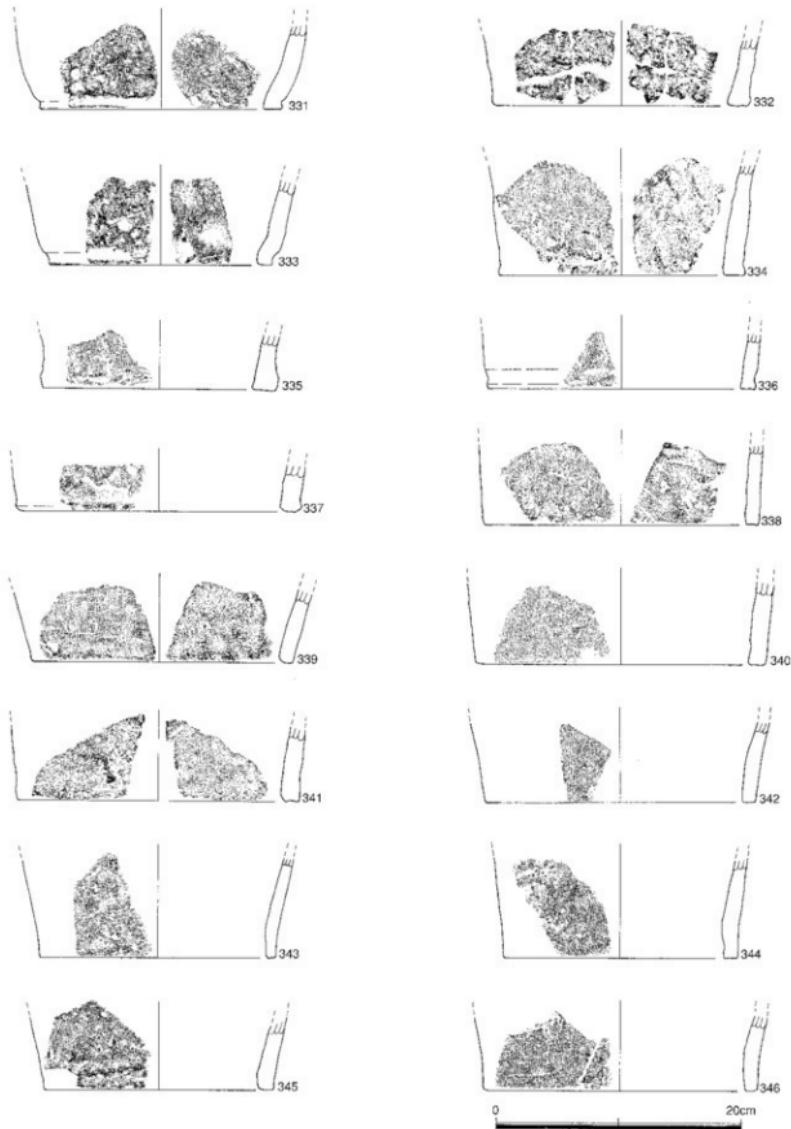
第32図 L トレンチ出土埴輪7



第33図 L トレンチ出土埴輪 8

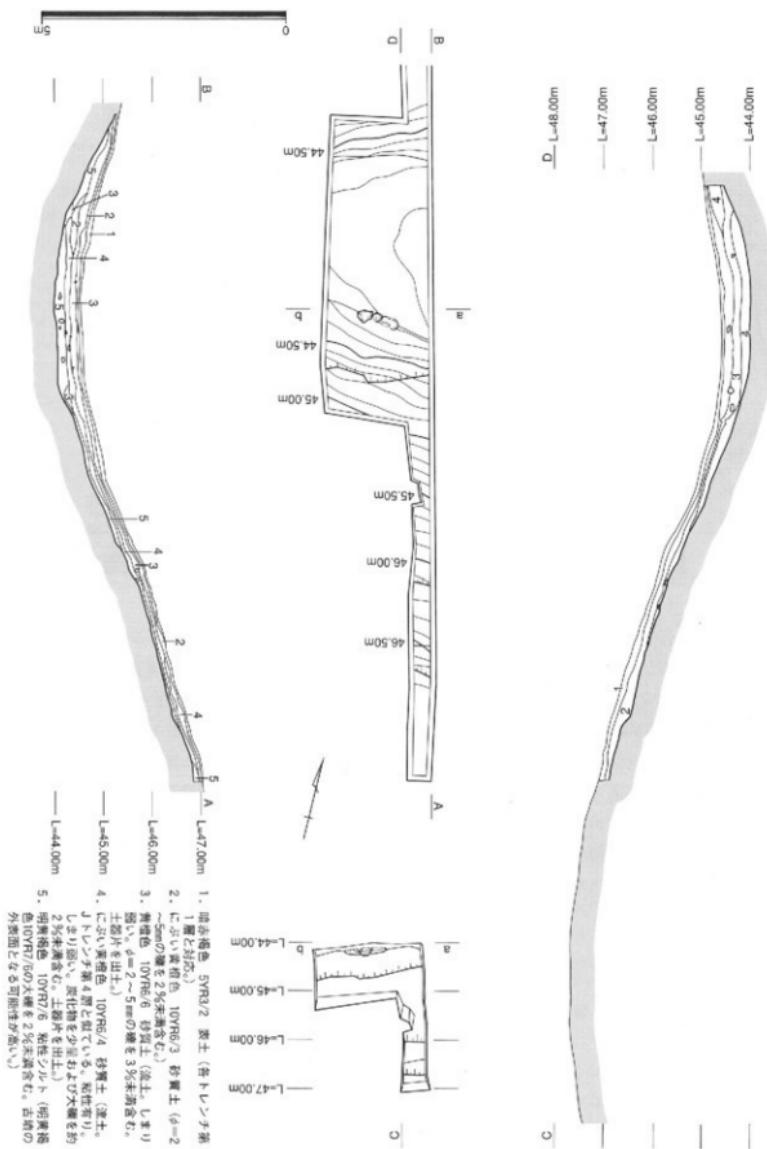


第34図 L トレンチ出土埴輪 9



第35図 L トレンチ出土埴輪10

第36図 M112号平・断面図(剖面図)



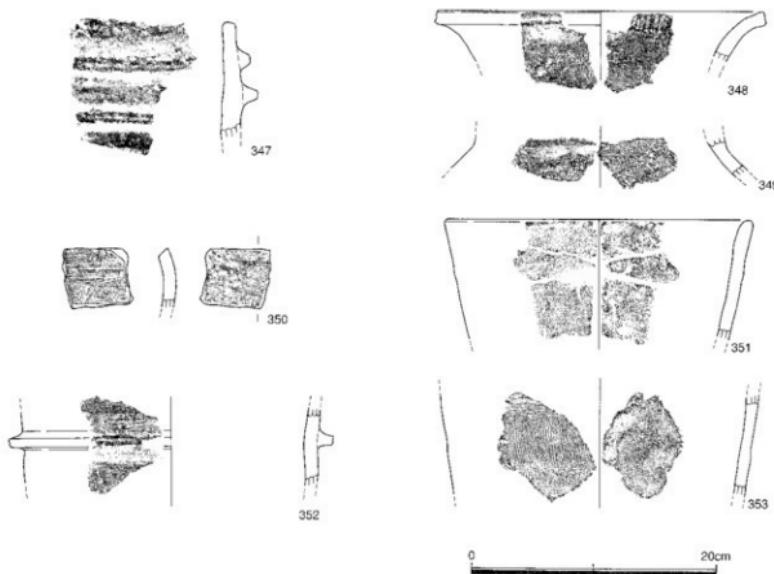
M トレンチ（第36図）

後円部北側に設定したトレンチである。掘削溝を検出した。基本層序は表土（腐葉土）、墳丘盛土（流土）、岩盤風化土（地山）となるが、北側は掘削溝内堆積土で5層に分層される。埴輪列は検出されなかった。第1段テラス裾を確認した。掘削溝北側上場（後円部墳丘裾）には、列石状に区画するものと思われる人頭大程度の砂岩の並びを一部検出した。掘削溝の規模は、中央部で幅約5m、墳丘裾からの深さは約1mである。

出土遺物（第37図）

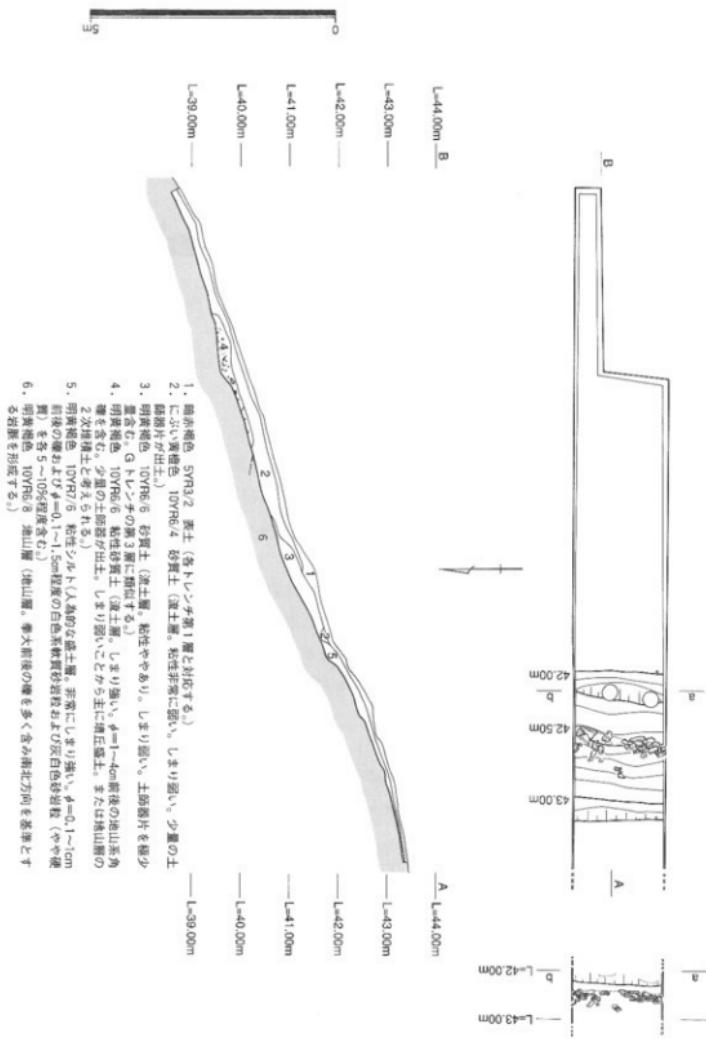
埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

このほか墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、叔形埴輪の一部である可能性が



第37図 M トレンチ出土埴輪

第38図 N-Lバフ子平・黒・立面図



考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪の基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

347は圓形埴輪である。上方ほど器壁が薄くなる板状の壁体をもち、断面台形で突出の高い突脊が水平方向に2条巡る。全国的には30以上の中墳からの出土が知られる（道 2005）が、四国でも初めての出土事例である。

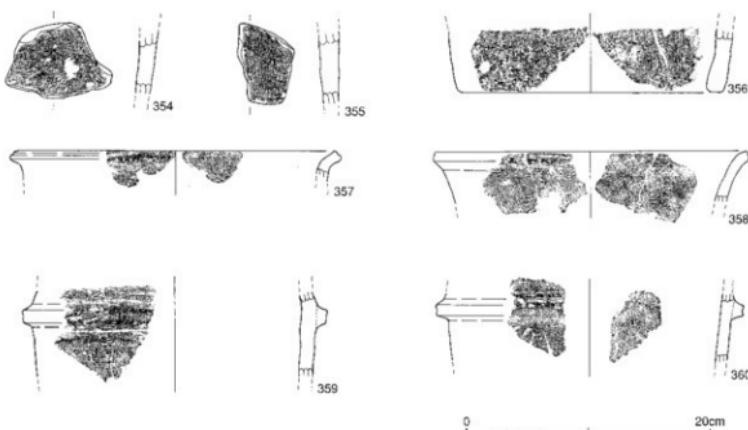
Nトレーニング（第38図）

前方部東側中央、斜面に直交するように設定したトレーニングである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。

第1段墳丘裾、第1段テラス、第2段墳丘裾を確認し、第1段テラスにいたる斜面では葺石を確認した。また第1段テラスにおいて円筒埴輪列を確認した。

出土遺物（第39図）

出土した埴輪は小片であるため、詳細は不明である。円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2種がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外周付近については1次調整として斜面のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。354は内外面とも器表面の調整が粗い不明形象埴輪である。356は盾形や蓋形とみられる形象埴輪の基部である。



第39図 Nトレーニング出土埴輪

○トレンチ（第44図）

前方部西側中央、斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・埴丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

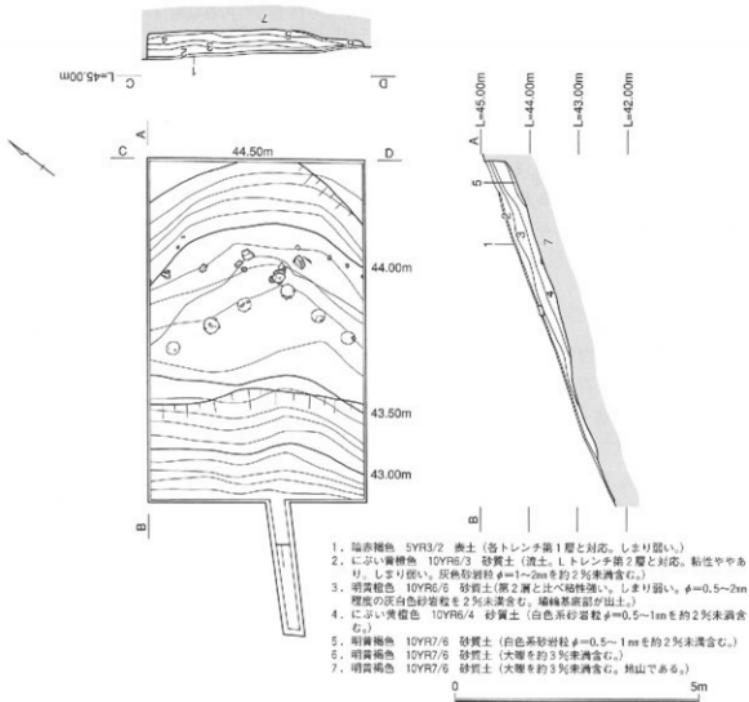
第1段埴丘裾、第1段テラス、第2段埴丘裾は確認できるものの、葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

出土遺物

埴丘盛土中より若干の円筒埴輪片等が出土しているが、小片のため実測可能なものはなかった。

Pトレンチ（第40図）

西側括れ部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・埴丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。括れ部の張り出しはない。



第40図 Pトレンチ平・断面図（括れ部）

第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認した。第1段テラス上においては円筒埴輪列の基底部を検出した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。

また墳丘裾、および第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。流出のため遺存状況は良くないが、出土状況から葺石は墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。

出土遺物（第41～43図）

埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面凸形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。透かし孔は円孔に復元されるもの数点を確認している。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年の二期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

このほか墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪片の出土は後円部墳丘斜面と後円部墳頂主体部の盗掘坑埋土中に限定されており、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

361は鞍形の可能性のある形象埴輪の板状の破片である。内外面の器表面の調整の違いが明瞭である。362・363・364は器壁がやや薄く緩やかな円弧を描く不明形象埴輪である。364には外面からの穿孔がある。

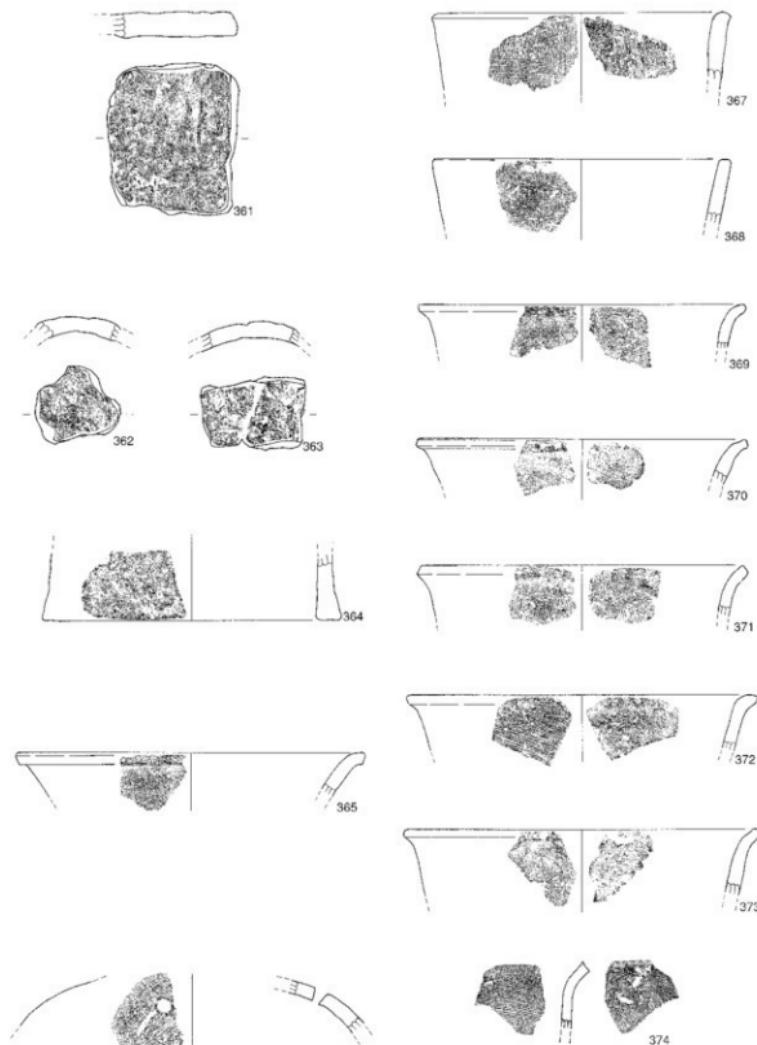
Q トレンチ（第46図）

後円部南東斜面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉砂群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版巣状況はみられない。

第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認した。墳丘裾および第1段テラスにいたる斜面裾部では一部で葺石を検出した。葺石はその出土状況から墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画する構造をとる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用し、基底石の上に葺石を積み上げ、各段墳丘斜面部裾部外周に葺石を貼り付けて巡らせる。埴輪列は検出されなかった。

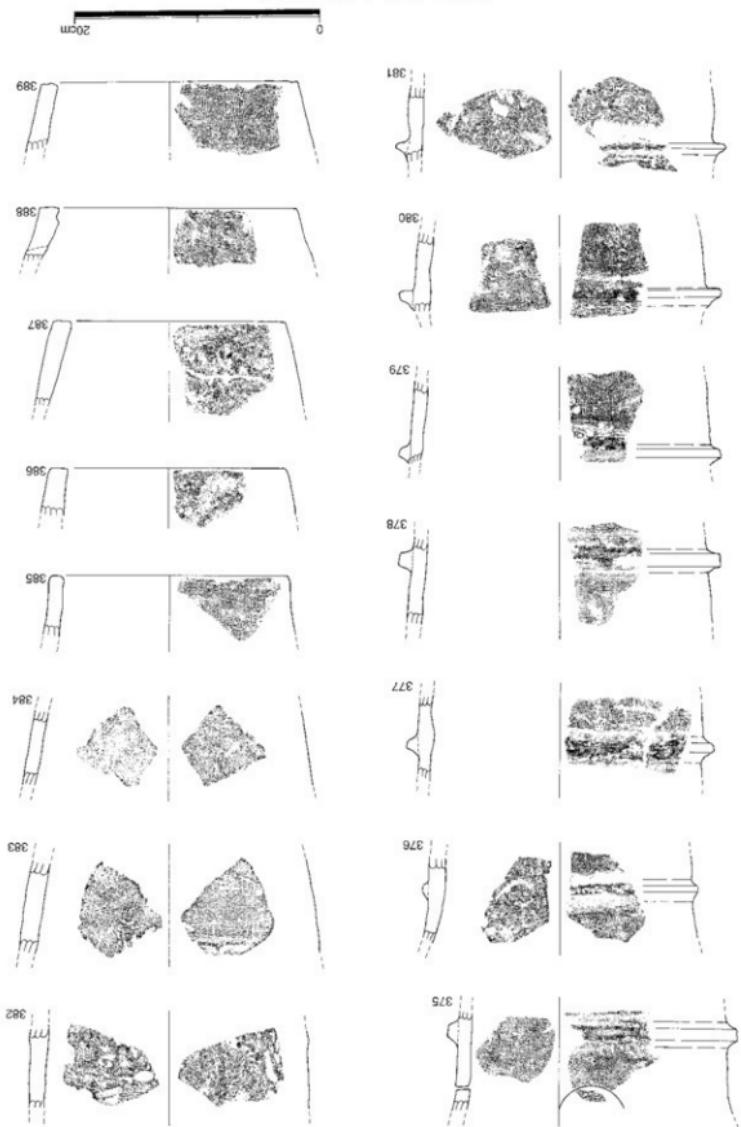
出土遺物（第47～49図）

土師器甕が出土している。小片であるため、詳細は不明である。埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、胴部には断面凸形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。透かし孔は円孔に復元されるもの数点を確認している。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ス



第41図 P トレンチ出土埴輪1

第42图 P412号出土埴輪2



トロークの長い A 種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年 II 期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。その他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、鞍形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪片の出土は後円部墳丘斜面と後円部墳頂主体部の壺掘坑埋土中に限定されており、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

396は盾形埴輪の盾面右側邊である。3条の沈線を基調とする綾杉文によって盾面が区画される。おそらく「II」字形の盾面分割をもつものであろう（高橋 1988）。区画の内側には巴文が描かれる。巴文は中央から大きく伸びており、2条一対のものと、3条・4条が一対になる単位がある。区画の外側には、内向・外向を交互に配した鋸歯文が盾面周囲を巡る線刻区画内に描かれる。盾面裏側には、基部と盾面とをつなぐ補強のための粘土が貼り付けられている。家形での例（58・140）との違いは、水平方向に細長く取り付けられていることで、運搬時の把手としても使用されていた可能性が高い。

397は3条の線刻を基調とする綾杉文の描かれたもので、叔形の可能性のあるものである。398・400は線刻による網代文様の表現された家形埴輪の屋根部分である。399は粘土板の接合の様子から家形・盾形とみられる。

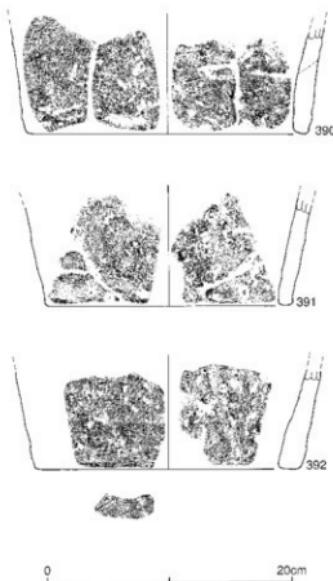
R トレンチ（第44図）

後円部南西斜面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

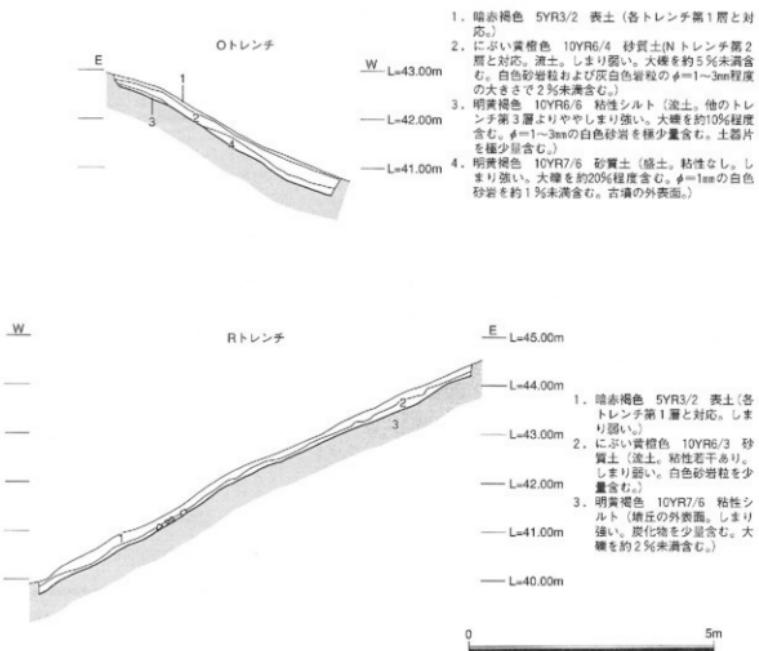
第1段墳丘裾、第1段テラス、第2段墳丘裾は確認できるものの、葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

出土遺物（第45図）

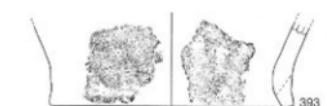
出土した埴輪は小片であるため、詳細は不明である。円筒埴輪は、口縁については口径を計測する例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2種がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜面のハケメ調整を施したのち、A 種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長い A 種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本と



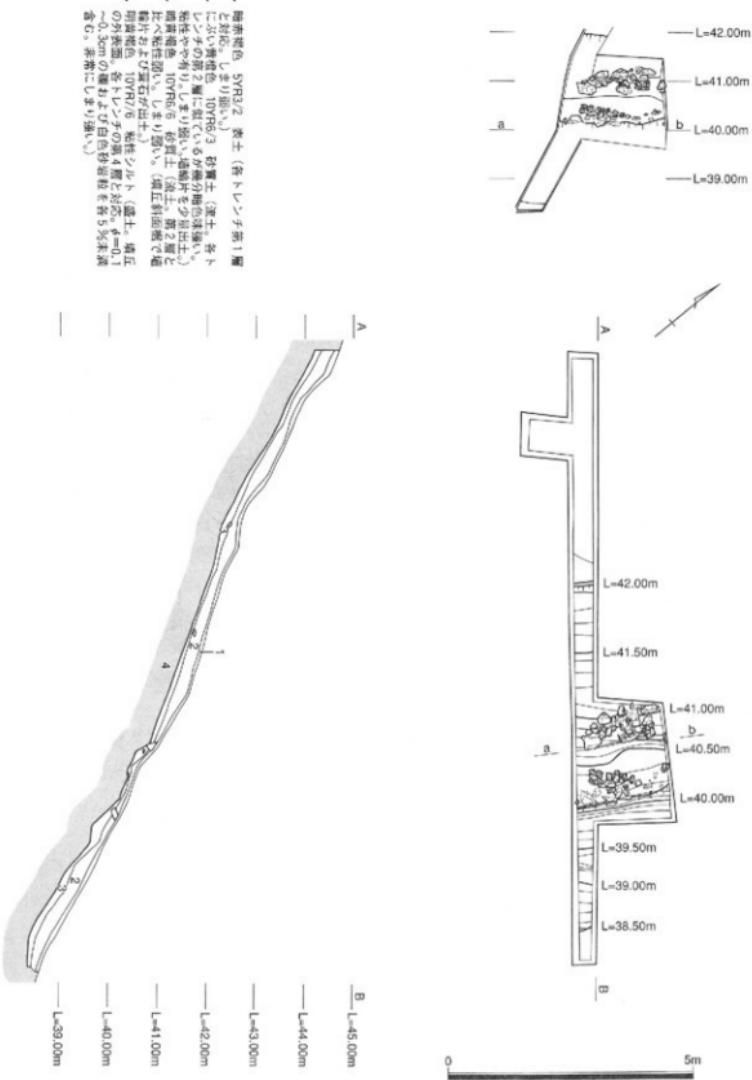
第43図 P トレンチ出土埴輪 3



第44図 O・Rトレーンチ土層断面図



第45図 Rトレーンチ出土埴輪



第46図 Q トレンチ平・断・立面図

している。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

S トレンチ（第50図）

後円部北東側、斜面に直交して設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第1段テラス、第2段外周裾、円筒埴輪列を検出した。また第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。流出のため遺存状況は良くないが、出土状況から葺石は墳丘斜面全体ではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べる。その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせる。

出土遺物（第51図）

墳丘流土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、報形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測する例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外周付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本來は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

T トレンチ（第56図）

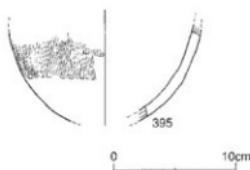
後円部北側斜面から掘削溝にかけて設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

出土遺物

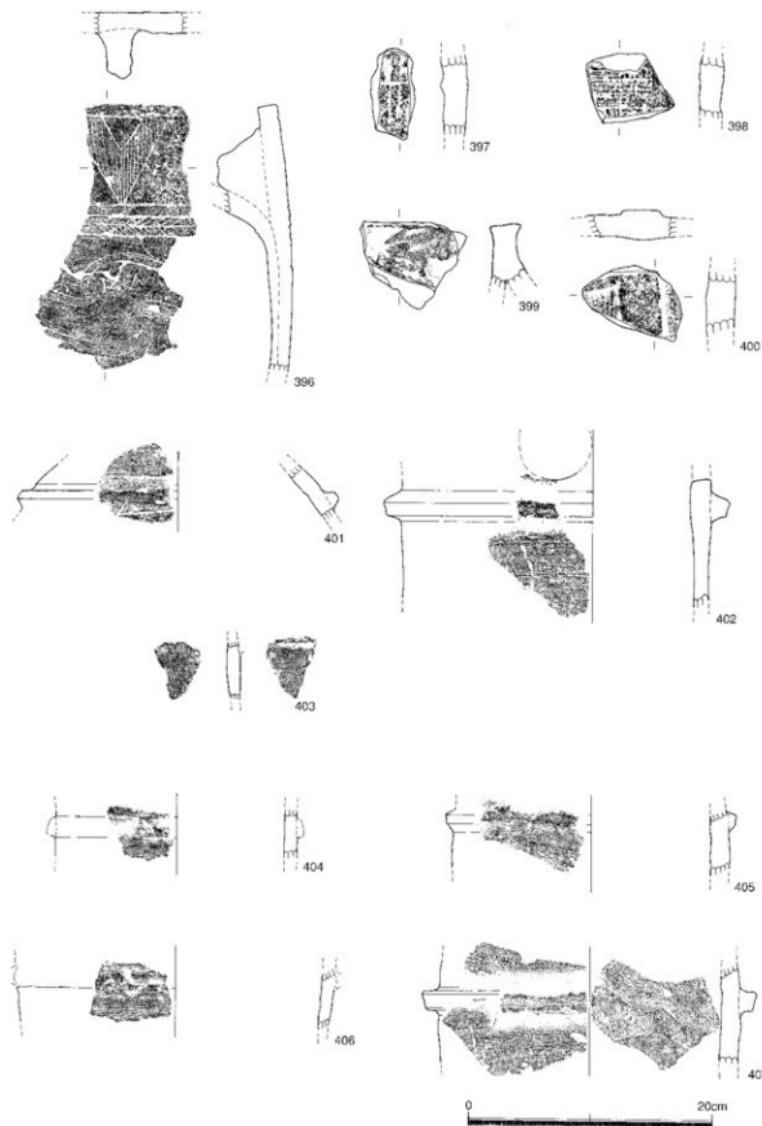
若干の埴輪片が出土したが、いずれも小片のため実測可能なものはなかった。

U トレンチ（第56図）

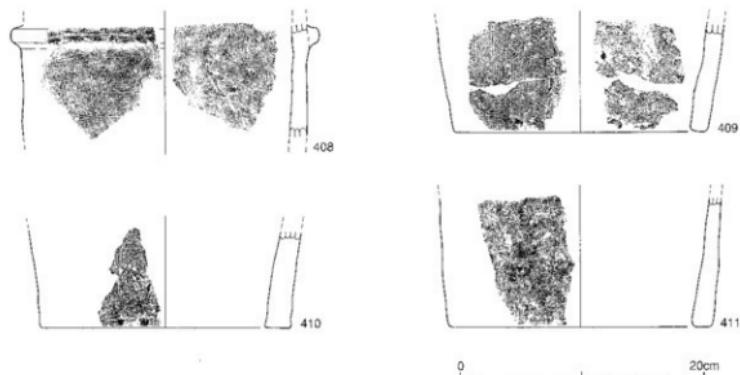
後円部北側斜面から掘削溝にかけて設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。



第47図 Q トレンチ出土土器



第48図 Q トレンチ出土埴輪 1



第49図 Q トレンチ出土埴輪2

出土遺物

若干の埴輪片が出土したが、いずれも小片のため実測可能なものはなかった。

V・W トレンチ（第52図）

前方部前面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・埴丘底土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

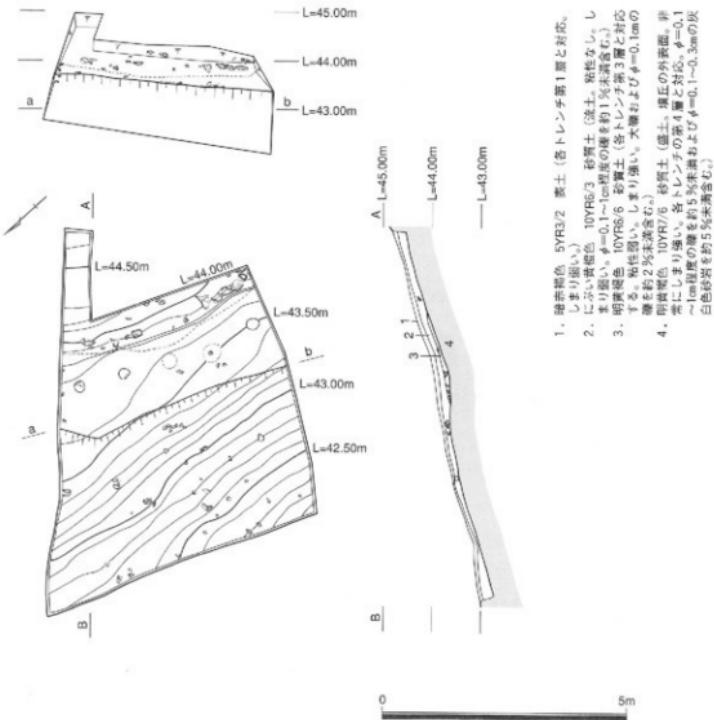
第1段テラス、第2段外周裾、円筒埴輪列を検出した。また第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。出土状況から葺石は埴丘斜面全体ではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べる。その上に葺石を埴丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせる。

第1段テラス上および前方部第2段前面埴頂平坦面において円筒埴輪の基底部を確認した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。

出土遺物（第53～55図）

埴丘底土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、稜形埴輪の一部である可能性を考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外間にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

埴丘底土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していな



第50図 Sトレンチ平・断・立面図

いものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

415~419は鞍形とみられるものである。平行な線刻や、それらを基調とする綾杉文が表現されている。420は笠の縁部に家形と同様の押縁が線刻で表現された蓋形である。421は粘土板の接合からみて、盾形あるいは小形の家形であろう。

Xトレンチ（第56図）

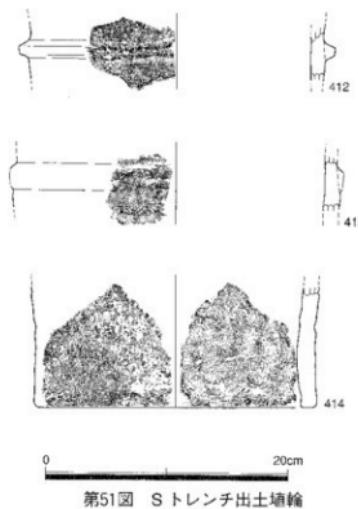
前方部西側中央、斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・埴丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第1段埴丘掘、第1段テラス、第2段埴丘掘は確認できるものの、葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

出土遺物

埴丘流土中より若干の円筒埴輪片等が出土しているが、小片のため実測可能なものはなかった。

1. 浅赤褐色 SYR3/2 砂土(各トレンチ第1層とおむね同じ色)
2. にがり黄褐色 DYR3/3 砂質土(洗土。粘性なし。しりもち強度。 $\phi=0.1\sim1cm$ 粒の隙率約1%未満含む。)
3. 単純褐色 DYR6/6 砂質土(各トレンチ第3層とおむね同じ色。粘性弱い。しりもち強度。大體および $\phi=0.1\sim1cm$ 粒の隙率約2%未満含む。)
4. 鮮赤褐色 DYR7/6 砂質土(埴丘。堆疊の外表面。非常にしりもち強度。各トレンチの第4層とおむね同じ色。 $\phi=0.1\sim1cm$ 粒の隙率約5%未満含む。 $\phi=0.1\sim0.3cm$ の灰白色砂岩を約5%未満含む。)



第51図 Sトレンチ出土埴輪

Zトレンチ（第56図）

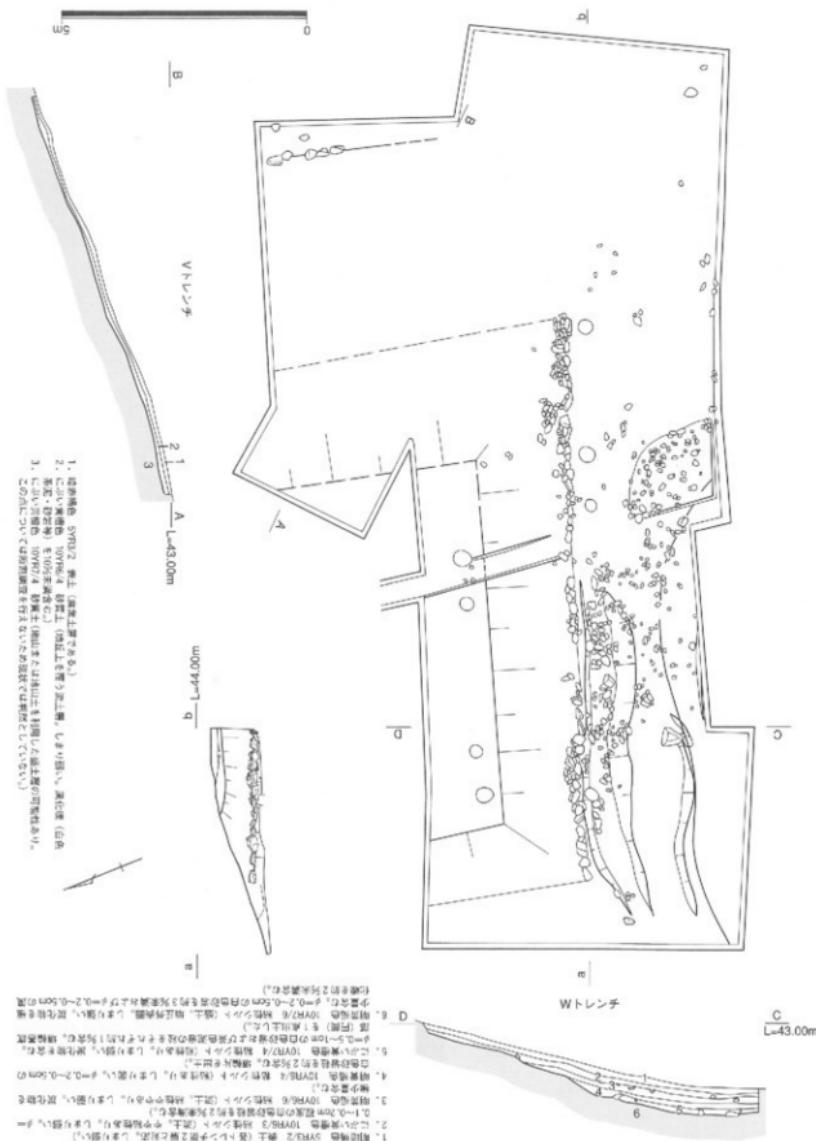
後円部北側斜面から掘削溝にかけて設定したトレンチである。基本層序は表土(腐葉土)・墳丘盛土(流土)・岩盤風化土(地山)・和泉層群岩盤となる。流土中からは外表面から流出した鉢石や埴輪片が出土しているが、原位置は遊離している。

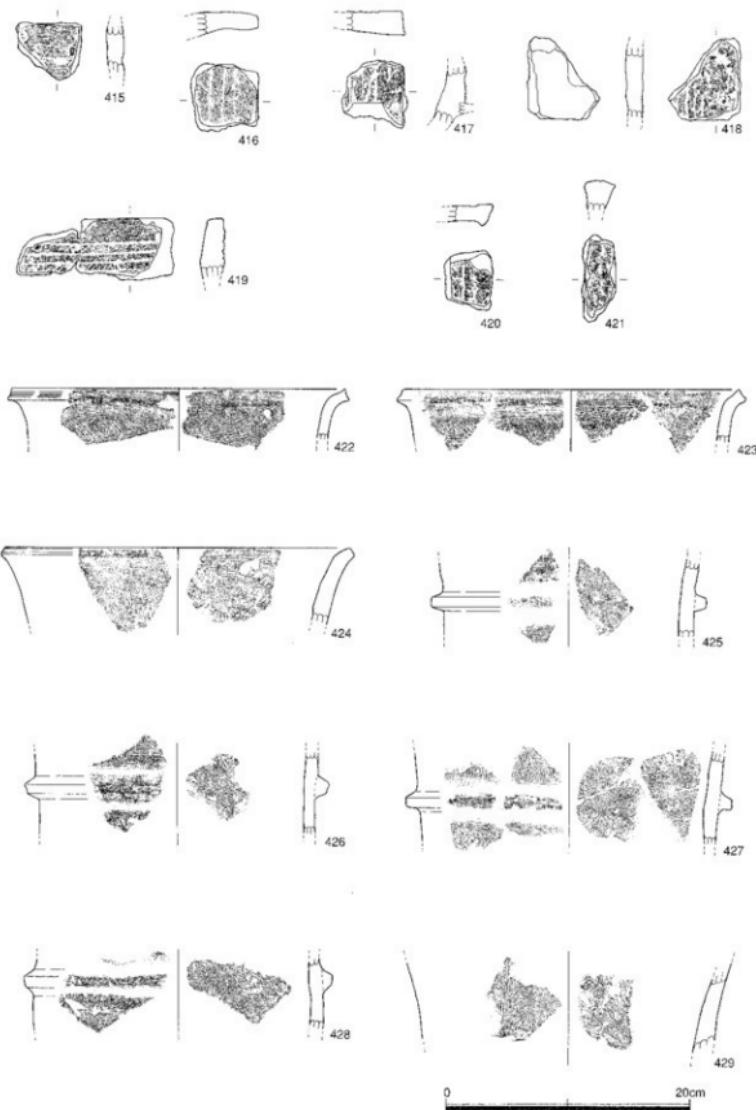
出土遺物（第57図）

若干の埴輪片が出土しているが、いずれも小片のため実測可能なものは少ない。墳丘流土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、報形埴輪の一部である可能性を考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25~30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部下位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のII期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

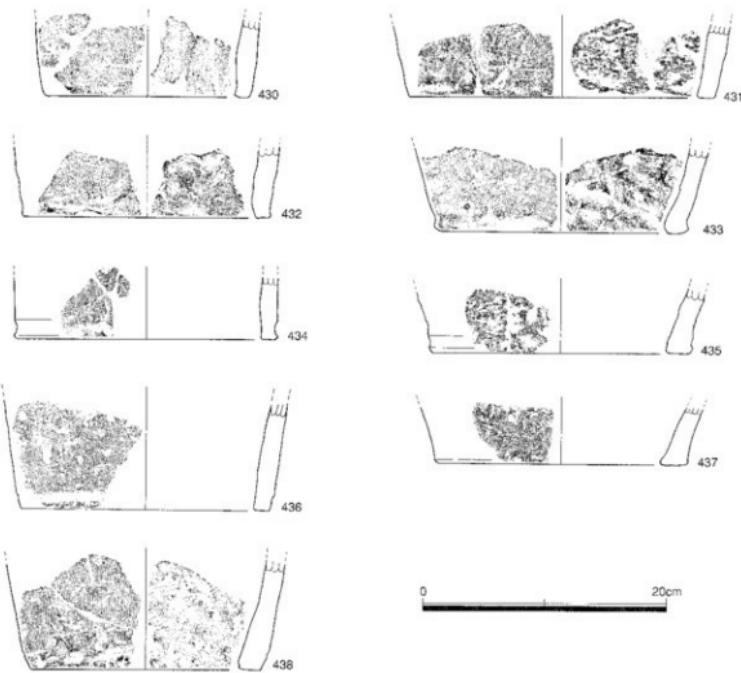
墳丘流土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

第52图 V-W-HLZ手平·断·立面图(前方部前面)

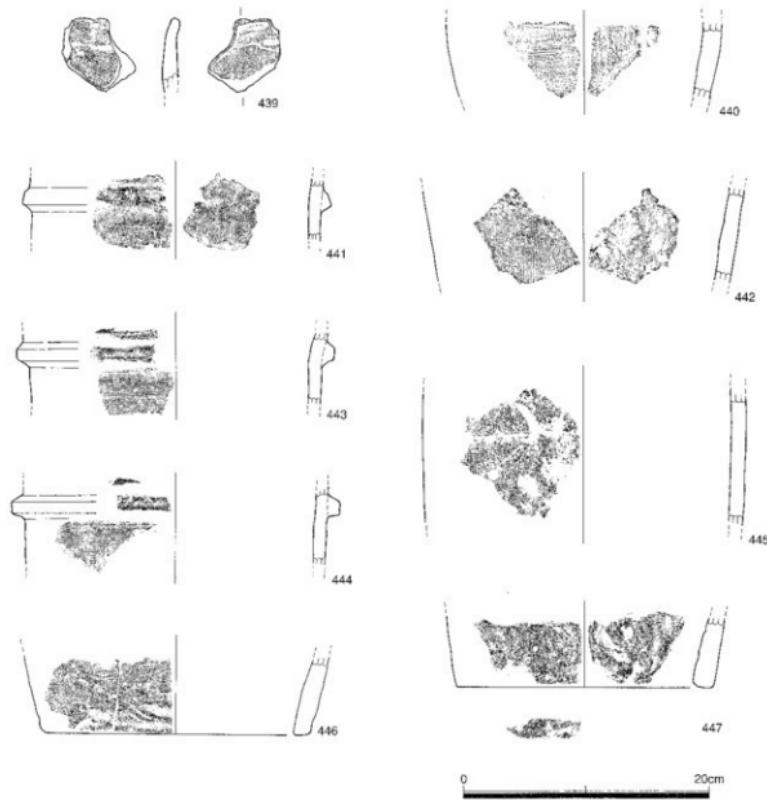




第53図 Wトレンチ出土埴輪1



第54図 W トレンチ出土埴輪 2



第55図 J-W トレンチ出土埴輪